

要旨およびパネリスト紹介*

I. 導入講演

司会：木村 護郎(クリストフ) (上智大学)

ジャン=クロード・オロリッシュ

最初の世界化：アジアにおけるヨーロッパ文法

ギリシャ・ローマの文法は、中世初期にアイルランドとイングランドの修道僧によって改変され、キリスト教文法となった。このラテン文法を近代のヨーロッパ諸語に応用することにより、ヨーロッパ文法が生まれた。16～17世紀の宣教師は、さらにこの文法を自分たちが「発見」した言語に当てはめた。宣教師たちは、今なお使用されるグローバルなメタ言語を作り出したのである。アジアにおけるイエズス会文法を例にとり、この「文法化」という技術革命について論じたい。

Jean-Claude HOLLERICH イエズス会司祭。上智大学外国語学部ドイツ語学科長。同大学ヨーロッパ研究所所長。17世紀タイのイエズス会士書簡を刊行準備中。主要論文：“A Different Way of Dialogue” (*The Journal of Sophia Asian Studies* No.12, 1994)、“Die Grammatik im Frühmittelalter” (『中世における自由学芸の伝統』、研究成果報告書、平成9年)、“Die französischen Jesuiten in Siam” (*Bulletin of the Faculty of Foreign Studies, Sophia University*, N.41, 2006)。

ハンフリー・トンキン

アジアにおけるニトベ・シンポジウムの意義

「新渡戸プロセス」が誕生した背景には、古くは1960年代に芽生え、その後の社会言語学および言語政策研究の発達によって促進されたある取り組みがある。それは、効果的な国際コミュニケーション手段を緊急に必要とする現実と、言語的多様性を保全すべきであるとする希求との、一致点を探る試みである。主要言語のみが使われる状況から脱却し、少数言語の平等な使用を目指す、下方向への計画はすでに多く行われてきた。しかし、主要言語間の抗争を超越し、国際言語コミュニケーションの平等なあり方を模索する、上方向への計画は少ない。第1回新渡戸シンポジウムは1996年にプラハで開催され、その後、ベルリン(1999年)、北京(2004年)、ヴィリニウス(2005年)と続いた。これまでは欧州連合(EU)を始めとするヨーロッパの言語政策に注意を向けがちであった。今回のシンポジウムでは、アジアにおいて諸言語が国際

* パネリスト略歴は2007年8月現在の情報による。

的に使用されることへの対応という問題を取りあげたい。これは政治家がほとんど触れることのない、言語学者もそれほど多く研究していないテーマである。

Humphrey TONKIN 米国ハートフォード大学、人文学教授、名誉学長。英文学および国際交流の職務に加え、言語政策および言語計画の諸側面に関する英語およびエスペラントでの著作多数。専門誌 *Language Problems and Language Planning* をプロバル・ダシグプタと共同編集。世界言語問題調査記録センター（CED）所長。

佐藤 全弘

新渡戸稲造の架け橋の思想と補助言語

新渡戸は71年の生涯で7つの橋をかけたと思う。(1) 東と西を渡す橋、(2) 農村と都市にかける橋、(3) 学問と日常をつなぐ橋、(4) 男と女を渡す橋、(5) 古典と現代を結ぶ橋、(6) 理想と現実にかける橋、(7) 時と永遠を渡す橋がそれである。外国語はこの架け橋の手段であった。新渡戸はエスペラントは学ばなかったが、世界大会の発表の1/4から半分は判ったという。しかしエスペラントは東洋の言語は全く考慮していない。すべての国民がその意思を公平に発表できる公平な人工言語を補助言語とすることが、通商貿易にも、学术交流にも、永久平和実現のためにも必要な時はすでに来ている。新渡戸がこの言語民主主義を主張してから86年、今なお相互無理解に基づく戦火が多くの人を、特に女性と子供を苦しめている。新たな架け橋の必要が今こそ痛感される。

SATO Masahiro 大阪市出身。元大阪市立大学教授、関西外国語大学教授。現在、大阪市立大学名誉教授。愛農高校後援会会長、新渡戸基金教育部会長ほかの要職にある。専門は哲学。著書に『カント歴史哲学の研究』、『藤井武研究』、『矢内原忠雄と日本精神』、『新渡戸稲造：生涯と思想』、『日本のこころと「武士道」』、『クリスマス講話』、『現代に生きる新渡戸稲造』、『希望のありか：内村鑑三と現代』、『聖書は性についてどう教えるか：「雅歌」に学ぶ』ほか。訳書に『武士道』ほか多数。

II. 主題講演：アジアにおける言語政策の課題と挑戦

司会：マーク・フェテス（サイモン・フレージャー大学）

木村 護郎 クリストフ

国際語・外国語・少数言語：言語問題の多層性と相互連関性

ヨーロッパ言語がアジアで果たしている役割は、4つの側面に分けて考えることができる。国際語、外国語、少数言語、そして国民語（国家語）である。これらの4つの側面は二重の意味で密接に相互に関連している。第1に、同じ言語に複数の側面がみられる。第2に、これらの諸側面は相互の関係性のなかで規定され、相互に影響し

あって推移する。しかし、表面上、それぞれの側面が言語の異なる機能とかかわり、また異なる社会的な領域において現れるため、専門家の間においてさえ、諸側面がばらばらに論じられたり、不十分な関連づけがなされたりしてきた。本報告では、言語政策の議論においてさまざまな、一見必ずしも関連しない側面をあわせてとりあげる必要性を提起する。具体例は主に日本の文脈に即してとりあげる。

KIMURA Goro Christoph 上智大学外国語学部ドイツ語学科准教授。専門は言語社会学、言語教育学。とりわけヨーロッパの少数言語の動向（言語復興・言語再活性化）を研究。主要著書：『ことばへの権利：言語権とはなにか』三元社、1999年（共編）、『言語的近代を超えて：〈多言語状況〉を生きるために』明石書店、2004年（共著）、『言語にとって「人為性」とはなにか - 言語構築と言語イデオロギー：ケルノウ語・ソルブ語を事例として』三元社、2005年。

リチャード・バルダウフ

アジアにおけるヨーロッパ語の言語政策：成功と失敗

本論文では、東アジア各政治体における言語政策の可能性と限界について論じる。まず表を使いながらこの地域における言語状況および言語政策を概観し、本研究でとりあげる各政治体に関する言語計画状況のバックグラウンドを提供する。続いてそれぞれの政治体ごとに個別の事例を挙げ、ヨーロッパ語の言語政策の成功面と失敗面を見る。最後に、共通して結論できることとして、東アジア地域において言語政策がどの程度まで可能であり、また限界があるのかについて考察する。

Richard B. BALDAUF Jr. クイーンズランド大学教育学部助教授。国際応用言語学会 (AILA) 委員。論文著書多数。共著・共同編集に *Language Planning and Education in Australasia and the South Pacific* (Multilingual Matters, 1990)、*Viability of Low Candidature LOTE Courses in Universities* (DEET, 1995)、*Language Planning from Practice to Theory* (Multilingual Matters, 1997)、*Language and Language-in-Education Planning in the Pacific Basin* (Kluwer, 2003)、*Planning Chinese Characters: Evolution, Revolution or Reaction* (Springer, 2008)。

トーヴェ・スクトナブ=カンガス

教育における言語権：あまりに少なくあまりに遅い？

今日世界の先住民の子どもほとんど、またマイノリティの子ども多くは、国連ジェノサイド条約 (<http://www.hrweb.org/legal/genocide.html>) の第2条 (e) 「その集団の児童を他の集団に強制的に移すこと」および同 (b) 「その集団に属する人々に重大な肉体的又は精神的な危害を加えること」の定義によるならば、言語的ジェノサイドというべき教育を受けている。すべての人が教育を受けられる時代において、先住民やマイノリティの人々が民族や集団としての独自性を維持する上で最も重要な教育上の言語権は、母語で教育を受ける権利であるが、これは国際法上もほとんど保障されていないばかりか、権利の進展を妨げる動きも多く多くの国から起きている。先住民の権

利に関する宣言（最新状況は <http://www.docip.org/> を参照）の草案がたどった経緯がその例である。先住民やマイノリティの言語で教育が行われなければ、多くの場合、世界の言語的多様性の消滅・抹殺につながる。言語的多様性と文化的多様性は相互に関係し、またおそらく生物的多様性（の維持）にも関係するため、教育における言語権の欠如は、西洋科学の知識よりしばしば的確であると今日科学者も認めている伝統的・生態学的知識の継承を脅かすことになる。本論文では、教育における言語権を守るために今日までに行われてきたことは、あまりに少なくあまりに遅いのか、について考察し、アジアにおける進展の例をいくつかとりあげる。

Tove SKUTNABB-KANGAS ロスキレ大学（デンマーク）、オーボ・アカデミー大学（フィンランド）。マイノリティ教育、言語権、言語的ジェノサイド、英語の支配的普及などに関する論文・著書多数。2003年 Linguapax award 受賞。 <http://akira.ruc.dk/~tovesk/> 参照。

Ⅲ. パネルディスカッション1：アジアの近現代におけるヨーロッパ言語の役割と展望

司会：ウルリッヒ・リンズ

Ulrich LINS ケルン大学、ボン大学、東京大学にて歴史、政治、日本学を専攻。博士論文のテーマは大本教と日本の国家主義。ドイツ学術交流会（DAAD）前東京事務所長。主要著書：『危険な言語』岩波新書、1975年、『ドイツの統合』早稲田大学出版部、1999年（共編）。

ウーゴ・カルドーゾ

「ヨーロッパ言語」とは何か：言語分類についての課題としての高度接触変種

本論文では、言語分類のさまざまな基準を、とりわけ系統発生的分類に関してとりあげ、分類や用語の決定を左右する言語外の要素について指摘する。系統分類を高度接触変種に当てはめようとする場合、非常に複雑な問題がもちあがる。こうした変種には、類型の特徴として複数の（ときにまったく関連性のない）祖語の影響が観察されるためである。ここでは、ポルトガル語語彙を持つアジアのクレオール、特にインド=ポルトガル語ディウ変種を分析し、これらのクレオールを「ヨーロッパ言語」として分類することに、いかに類型上の論拠が乏しいかを明らかにする。また、アジア近代社会にこれらの言語が統合され維持されていくうえで、「ヨーロッパ言語」というレッテルが悪影響をおよぼす可能性についても論じる。言語分類を行う言語学者らは、用語が持つ社会的影響と意味を慎重に考慮すべきである。

Hugo CARDOSO ポルトガル出身。アムステルダム大学在籍。専門は言語学。主な研究テーマは、ポルトガル語語彙を借用したクレオール語。サラマッカ語におけるポルトガル語要素、インド=ポルトガル語クレオールに関する論文がある。現在、ディウのインド=ポルトガル語の文書化と言語記述を目的とする研究プロジェクトに従事。

セルゲイ・アニケーエフ

ロシア文化と日本社会

いずれの国も、近隣国との接触やその影響（一方的であれ双方向的であれ）なしに存続し発展することは不可能である。日本もまた例外ではない。古代日本の人々は、進んだ国々、すなわち古代朝鮮の三国、のちには中国から知識を取り入れながら、社会生活を近代化していった。これらの国々の影響は、長い時間をかけて少しずつ日本に浸透したため、異文化として意識されることがなかった。これに対し、ヨーロッパの国々およびアメリカ合州国との2世紀にわたる鎖国後には、異文化が嵐のように侵入し、日本人の生活は激変した。日本は、特にこれらの国々の政治経済制度の研究に没頭した。この点で、当時のロシアは模倣すべきモデルとなりえず、競争力にも欠けていた。しかし、精神的価値、特に日本に対するロシアの文化的影響に関して言えば、状況はまったく異なっていた。ここでは、両国の歴史上の政治イデオロギーのため日本において無視されがちな、日露間の文化的交流に光を当てる。初期にはロシア正教会が橋渡し役となり、ロシア語を日本人の間に普及させた。こうしたロシアの文化侵入について、およびそれが日本に何をもたらしたのかについて、明らかにする。

Sergey ANIKEEV ロシア極東大函館校 副校長・ロシア語専門教師。外国語教育、社会生活における宗教、異文化間の影響関係について研究。出口王仁三郎『道の葉』（大本教学研鑽所、2000年）、櫻井勝之進『次代に伝える神道』（神道国際学会、2001年）など、神道や大本に関する文献のロシア語訳を行っている。日本人向けのロシア語教材に、『税関実用ロシア語基礎教程・練習問題・文法解説』（ウラジオストク、極東大学、2003年）など。

ゼキーマー・チョイドン

モンゴルの発展におけるヨーロッパ言語の役割：過去と未来

12世紀から13世紀にかけて、モンゴルは中央アジアに勢力を拡大していたが、その際にモンゴル人が、ヨーロッパ語を含むさまざまな外国語を学び、使っていたことが歴史的資料から知られている。本報告では、モンゴルの社会生活においてヨーロッパ語が果たしてきた歴史的役割、そして現在果たしている役割について簡単に紹介し、またモンゴルにおけるヨーロッパ語、特にフランス語、ドイツ語、ロシア語、英語の学習の歴史にも言及する。さらにヨーロッパ語に関するモンゴルの言語政策と、政治、教育、社会経済、社会コミュニケーションなどの領域におけるその実行について議論する。特に、社会生活において大きな役割を担ってきたロシア語に焦点が当てられる。最後に、将来のモンゴルにおけるヨーロッパ語政策の方向性について、発表者の私見を述べたい。

Zegiimaa Choidon 博士、Sc.D.、教授。言語政策国立アカデミー会長、研究プロジェクト「モンゴル政府言語政策に関する学問的基盤」総責任者、モンゴル・ロシア共同プロジェクト「グローバル化時代における国家語：ロシアとモンゴル」のモンゴル側総責任者。人文

大学大学院学部長。国立プーシキン記念ロシア語大学（モスクワ）にて1992年に博士号、1998年にSc.D.を取得。専門領域は社会言語学、言語政策、語用論、言語エチケットおよびポライトネスなど。

市之瀬 敦

アジアによみがえるポルトガル語

かつて大航海時代においてポルトガル語がアフリカやアジアでヨーロッパ人と現地住民の間のリンガ・フランカとして機能していたことは広く知られている。それがピジン化あるいはクレオール化した変種であったか否かは別として、ポルトガル語が異民族間で重要な「橋渡し言語」であったことは確かである。その後、ポルトガル語はフランス語や英語の伸張を前に衰退を始めるが、20世紀末から21世紀初頭にかけて新たな動きが確認できる。まず2002年に独立した東ティモールにおいて、ポルトガル語は2つの公用語の1つとして採用された。21世紀に入り、ポルトガル語公用語国が増えたのである。さらに忘れてならないのは、1990年代以降、日系ブラジル人を中心とし「出稼ぎ」が増加したことである。現在は約30万人のブラジル人すなわちポルトガル語の母語話者が日本で生活しているのだ。日本にとってのポルトガル語、ポルトガル語にとっての日本を考察対象としてみたい。

Atsushi ICHINOSE 上智大学外国語学部ポルトガル語学科教授。専門はポルトガル語学、ピジン・クレオール諸語研究。特にアフリカやアジアにおけるポルトガル語の使用状況とポルトガル語系クレオール語を研究。主要著書：『クレオールな風について：ギニア・ビサウへの旅』社会評論社、1999年、『ポルトガルの世界：海洋帝国の夢のゆくえ』社会評論社、2000年、『海の見える言葉：ポルトガル語の世界』現代書館、2004年、『ポルトガル語のしくみ』白水社、2007年。

泉 邦寿

日本社会におけるフランス語

幕末に軍事的な必要から初めて学ばれるようになったフランス語は、明治維新後、国の近代化推進、とりわけ軍事、法律、産業面の知識と技術を導入するために学ばれてきただけでなく、民権思想への影響も大きかった。その後、フランス語との結びつきの対象は文学、音楽、美術方面へとシフトしていき、それは現在まで続いている。したがって、これまでのフランス語が日本の社会に与えてきた影響は主としてエリート層に対してであって、言語そのものが日本の社会に直接的なインパクトを与えたとは言いがたい。今、料理、菓子、ファッション、化粧品を中心とした商品名や店名などで町にはフランス語があふれている。これはこれまでになかった大衆化の現象ではあるが、ここでのフランス語は、マクルーハンのことばをもじれば、メッセージではなく、マッサージとしての役割のみとっていい。現在の日本の社会では世界中が英語だけ

で事足りると考える傾向、ある種の一言語主義的幻想がますます強くなりつつあるが、フランス語がそれに対する1つの警告と認識を改めさせる力となり得るかどうかは、ヨーロッパならびにフランス自身の言語に対するあり方にかかっているとみえる。

IZUMI Kunihisa 上智大学外国語学部フランス語学科教授。専門はフランス語学、意味論、社会言語学。とりわけ、日仏語の対照意味論、ならびにヨーロッパ統合と言語の問題をフランス、ベルギー、ルクセンブルクを中心に研究している。主要著書：『フランス語学研究的の現在』白水社、2005年（共編著）、『グローバル化する世界と文化の多元性』SUP 上智大学出版会、2005年（共編著）、『フランス語の小径』白水社、2004年。

白井 裕之

「超欧」のためのエスペラント：日本における社会進化論的位置づけ

近代の日本人はヨーロッパ言語、特に英語に対して両義的な態度を取ってきた。つまり、一方ではヨーロッパ語を愛するあまり、日本語を捨ててヨーロッパ語に乗り換えようという提案すらなされたのである。しかし他方で英語に対して強い憎悪が表明され、学校教育や公的な場からのその追放が叫ばれたこともある。この両義性は日本人が抱えてきた、西洋列強に対抗するために西洋文明を学ぶというジレンマに由来する。まさにこのジレンマのために多くの日本人が、社会進化論的に解釈された「超欧」の手段として、エスペラントに関心を寄せることになったのである。

USUI Hiroyuki 1967年生まれ。青山学院大学で修士号取得。日本エスペラント学会研究教育部。共編に『ことばへの権利』、共著に『言語的近代を超えて』、『ポーランド学を学ぶ人のために』、論文に「森有礼と北一輝の共通項：非日本語採用という『国家戦略』」、「北一輝の〈エスペラント採用論〉に見る近代日本の〈英語問題〉〈国語問題〉」など。

■ コメント：田中 克彦

TANAKA Kacuhiko 一橋大学名誉教授。専門は言語学、モンゴル学。著書に『ことばと国家』、『言語学とは何か』、『エスペラント』（以上、岩波新書）、『国家語をこえて』、『ことばのエコロジー』（以上、ちくま学芸文庫）、『差別語からはいる言語学入門』（明石書店）、『ことばとは何か』（ちくま新書）ほか多数。

* * *

■ 前日の議論総括：ティモシー・レーガン

Timothy REAGAN 現在、中央コネチカット州立大学（コネチカット州ニューブリテン）教育リーダーシップ学科教授。主な研究分野は、教育言語政策、異言語教育、文化的・言語的マイノリティ集団の教育。これらの分野での著作多数。最新の著書は *Critical Questions, Critical Perspectives: Languages and the Second Language Education* (Information Age Publishing, 2005)。

IV. パネルディスカッション2：アジアにおける英語 — 土着化と抵抗

司会：A・ギリダル=ラオ

A. Giridhar RAO 1963年生まれ。ハイダラーバード大学で博士号（英語学）取得。同大学非常勤講師。サイエンス・フィクションをテーマとした学位論文（1994）の執筆以来、同じくヨーロッパ啓蒙思想の産物であるエスペラントの、人間性解放のための可能性に着目。主な関心領域は、言語政策に関する記事執筆、非政府組織向け文書の編集制作、インターネット時代におけるコミュニケーションの可能性。エスペラントを教えるかたわら、マハトマ・ガンディー自伝をエスペラントに翻訳中。インド・エスペラント連盟の事務局長として、2008年2月にインドで開催される第5回アジア・エスペラント大会の準備に従事。

マレク・コシチェレツキ

日本の文化的文脈における外国語教育の展開

日本における外国語に関する経験と、それが日本の社会的な近代化に与えた影響について述べた研究で、英語で書かれたものは驚くほど少ない。外国語を学ぶことによって、日本人は外国における発展を分析し、また自国に適合させ、このような知識を自らの科学技術における革新に応用してきたのであった。本報告は社会文化的ないし社会言語学的な状況を総体的に描写し、日本の文化的文脈における外国語教育の位置づけを試みる。報告者に手に入る通時的、共時的情報を総合することによって、日本における外国語教育と、それが社会的近代化の過程にもたらした効果を評価したいと思う。

Marek KOSCIELECKI ポーランド、ニュージーランド、オーストラリアで教育を受けた。1970年代初頭、ウェリントンのヴィクトリア大学で英語とドイツ語を専攻。1984年、シドニー大学言語学部で応用言語学修士号を取得（当時の指導教官はM. A. K. ハリデー）。1996年、オーストラリア・パースのエディス・コーワン大学で応用言語学博士号を取得。中等教育、高等教育のレベルで教員経験あり。現在では香港公開大学助教授。

ロバート・フィリップソン

新しい言語帝国秩序：ヨーロッパから世界への教訓

英語の使用は世界的に拡大しつつある。ヨーロッパ大陸（欧州連合の機関およびその加盟国）では、これはアメリカ企業先導のグローバル化と軍事的活動、そして進行しつつあるヨーロッパ統合の直接的帰結である。威信を持っていたヨーロッパ語（フランス語、ドイツ語…）も格下げされかねず、これらの言語資本は蓄積過程を通して減価を強いられている。このような事態は世界市場や金融、メディア、そして高等教育の動向と密接に結びついている。英語の運用能力がある人は、その他の言語の話者に比べて不公平な利益を得ている。言語新帝国主義や、これへの代案を研究することは、超国家レベル、国家レベル、地域レベルにおける多言語政策の立案と結びつけられなければならない。

Robert PHILLIPSON イギリス出身。ケンブリッジ大学とリーズ大学に学び、アムステルダム大学で博士号を取得した。北アフリカおよび東ヨーロッパで英語を教えたのち、デンマークに移住。現在はコペンハーゲン商科大学教授である。代表的著書としては、*Linguistic Imperialism* (Oxford University Press, 1992)、*English-Only Europe?: Challenging Language Policy* (Routledge, 2003) がある。専門領域は、グローバル化における英語の役割、言語新帝国主義、言語権、社会言語学、言語教育学。経歴や業績の詳細は <http://www.cbs.dk/staff/phillipson> を参照のこと（一部ダウンロード化）。

河原 俊昭

日本における英語教育と言語政策

英語教育に関して、近隣のアジア諸国と比較して、「日本は遅れており、アジアは進んでいる」という声がよく聞かれる。その理由として日本の英語教授法に問題があると言われることが多い。また日本人の TOEFL のスコアが他国と比べて低い点が自嘲気味に言及されることが多い。しかし、これらは英語教授法の問題というよりも、日本人が従来英語をさほど必要とせず、それゆえに英語への関心が薄かったという事実から生じたと考えられる。日本では日本語が十分に機能している。科学・技術・行政・立法・司法・マスコミ・教育・産業の各分野で日本語が十分に機能している。日本は日本語で博士論文を書くことのできる国である。母語では専門的な分野をカバーできない他国と比較して、日本人の英語力の低さを嘆くことは誤解を招く恐れがある。翻訳で世界の様々な文献が読めて各分野で日本語で用が足せるという点、日本がアジアの中にありアジア諸国との人的・物的な交流が盛んになってきている点、国内に外国人住民が増え日本が多言語社会化しているという点、これらの諸点を踏まえて、日本ではどのように英語教育と言語政策が押し進められるべきか考えてみたい。

KAWAHARA Toshiaki 京都光華女子大学文学部教授。博士（社会環境科学）。専門は言語政策、英語教育、アジア英語。主要著書：『世界の言語政策』くろしお出版、2002年（編集）、『多言語社会がやってきた』くろしお出版、2004年（共編）、『外国人住民への言語サービス』明石書店、2007年（共編）、『アジア・オセアニアの英語』めこん、2006年（共編）。

馮 志偉

中国における英語の役割

本論は、中国における英語受容の紆余曲折を説明し、中国の英語教育の進展（英語教科書編纂、英語力テスト等）について紹介する。今や英語教育は中国において一大産業と化した感があり、学習者は増加の一途をたどっている。2008年の北京オリンピックにおいては多言語サービスが重視される。英語教育と並んで中国語教育・中国語学習へのでこ入れを提言する。英語教育と中国語教育の適正なバランスの確保は、中国において言語を政策的にどう位置づけるかという課題の延長上にある。

FENG Zhiwei 中華人民共和国教育部応用言語学研究所、上級特別研究員、コンピュータ言語学教授。北京大学、浙江大学、中国交通大学、黒龍江大学など大陸中国の多数の大学で特任教授。また、国家パターン認識中核研究所の学術諮問委員、国家言語委員会標準化委員会委員、中国国家学術基金審査員、国家哲学社会科学基金審査員、拡大欧州言語リソース基礎形成機関 (TELRI, EU) 諮問委員、香港専門用語協会諮問委員、国際言語リソース評価学会 (LREC) 諮問委員会委員を兼務するほか、*International Journal of Corpus Linguistics* (IJCL, アムステルダム)、*International Journal of Chinese and Computing* (IJCC, シンガポール)、『中国語文』(北京)、『中国科技術語』(北京)の編集委員でもある。22冊の学術書を刊行し、200篇の学術論文を発表している。

ジョセフ・エリントン

植民地主義・民族主義と広域コミュニケーション言語の普及

標準インドネシア語は、インドネシアの大多数の国民により第2言語として話されている点で、めずらしい国語である。本報告では、この言語にまつわる特異な植民地史を概説し、言語が話し手によってさまざまに「所有」されうる可能性について広く問題提起する。また、近年の東ティモールにおいて、インドネシア語がインドネシア政府に対する抵抗の道具となった経緯についても論じる。これら2つの時代の発展経緯は、どちらも言語「普及」の類似例とみなされがちだが、ここでは、それぞれの状況によって大きく異なりうる政治的文化的力学の複雑さを明らかにしたい。

Joseph ERRINGTON 米国イェール大学教授。専門は人類学、国際関係論、地域研究。マクミラン・センター東南アジア研究評議会代表。主要な研究はインドネシアの言語および社会変化、とりわけジャワ島南部・中央部におけるインドネシア語とジャワ語の2言語話者に関して行ってきた。近刊に *Linguistics in a Colonial World: A Story of Language, Meaning and Power* がある (2007年8月刊行)。

E・アナマライ

インドの言語生態系における英語

ここでは言語生態系を、自らの利益を追求する共同体間の関係と定義したい。この関係性は、言語間の競争によって常に測定されなおされている。以上を前提として植民地時代、国民国家全盛の時代、そして今日のグローバル化の時代のそれぞれにおいて、英語がインドの言語生態系の中で果たしてきた役割を解明することが本報告の主題である。英語はこの生態系内に位置と役割を占めようとする新種であり、その位置や役割については他の言語が英語と競合している場合もあれば、すっかりこれらを明け渡している場合もある。現状では英語やその他の諸語が、限られた資源をめぐって競争しているが、そこにおいて相互補完的な資源利用の実現が求められている。これこそは、インドやその他の多くの国が直面している課題である。本報告では、インドにおけるこの課題と、それに対するさまざまな反応について述べる。ここで問題となるのは、経済的地平と文化的地平の間に境界を設けることが可能かどうかである。進

化発展する言語間の関係性に対置されるのが、計画的な多言語政策である。後者の計画は、明示的に国家によって遂行されることも、暗黙のうちに市場によって推進されることもある。さらにグローバル化する市場において、国家や市場が持っている相対的な勢力についても言及する。

E. ANNAMALAI シカゴ大学で言語学博士号を取得し、マイソールのインド言語中央研究所所長を務めた。現在はイェール大学で教鞭を取っている。言語政策とそのプログラムに関する同氏の見解は長年の研究成果に基づいており、安定した多言語状態や言語使用において政府・地域共同体・個人の果たす役割を考慮している。このような見解は、論文“Reflections on a Language Policy for Multilingualism” (*Language Policy* 2: 2, 2003) に述べられている。またその研究の射程は、著書 *Managing Multilingualism in India: Political and Linguistic Dimensions* (2001) から知ることができる。インドにおける多言語使用の維持を研究する過程で、その多言語状態に占める英語の位置と役割にも関心を抱き、英語の教育的・政治的側面、そしてタミル語との併用の言語学的側面についての著作もある。またインド諸語、特にタミル語のデータベースや辞書の作成にも従事している。

アムリ・ワンデル

アジアの科学界における英語

20世紀には科学革命とインターネット革命があらゆる面にわたってわたしたちの生活に影響を及ぼした。英語が飛躍的に勢力を拡大したのも、この2つの革命に伴われてのことであった。英語は今や科学論文と学術会議の主要言語となった。東アジアの科学界でもその点は同じである。たびたび世界を相手にする中国や日本の科学者たちは、論文の大半を英語で書く。多くの学術会議が東アジアで行われるが、英語はそのすべての少なくとも主要な会議用語であり、ほとんどの場合は唯一の会議用語となっている。こうした風潮をわたしの個人的経験に照らして振り返り、また、この英語ヘゲモニーに対して見せるエスペランチストの態度と比較しようと思う。

Amri WANDEL 1954年生まれ。イスラエル在住。イェルサレム大学教授として宇宙物理学を講じる。専門は活動銀河、ブラック・ホール、宇宙生物学。ニューヨーク州立大学ストーブルック校にて博士号を取得後、プリンストン、メリーランド、スタンフォードの各大学講師、UCLA 客員教授を歴任。1992年以来エスペラント学士院会員。サンマリノ国際科学アカデミー教授。

■ コメント：吉武 正樹

YOSHITAKE Masaki 福岡教育大学英語教育講座准教授。専門はコミュニケーション学。「英語で異文化・国際コミュニケーションするとはどういうことか」をテーマに、英語教育などとも絡めながら研究を進めている。主要著書：『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社、2002年（共著）、『現代コミュニケーション学』有斐閣、2006年（共著）、『21世紀の英語科教育』開隆堂、2007年（共著）。

V. パネルディスカッション3：アジアにおけるアイデンティティ、トランスナショナリズムと言語権

司会：ハンフリー・トンキン（ハートフォード大学）

プロバル・ダシグプタ

母語の活力：翻訳による言語の育成

言語計画を議論する専門家たちが「言語の育成」と呼ぶ活動がある。この人たちによってこの活動が重視されるのは、まだ喪失されていない使用領域における言語の活力を維持するために必要なためである。本発表の主張は、言語の育成において翻訳学の最新の成果を活用するところにある。特権的または古典的なテキストによって（聖典によって）、母語の周囲に砦を築くような戦略は、あまり効果的とはいえない。むしろ、コミュニケーションの透明性を最大化することが必要とされている。このような考え方は、翻訳学における特定のアプローチに対応するもので、翻訳学における手法と言語計画の研究との連携を発展させることは以前から期待されてきたことである。

Probal DASGUPTA 1980年、ニューヨーク大学で生成文法に関する博士号を取得。その後、ニューヨーク、メルボルン、コルカタ、ブネー、ハイデラバードで言語学を、バーラストン（イギリス）、サンフランシスコでエスペラントを教えた。*Language Problems and Language Planning* 誌編集委員。主な著書に、*The Otherness of English* (1993)、*After Etymology* (2000)、小説のエスペラント訳4点、同エスペラントからの訳1点がある。2001年からエスペラント学士院副会長、2004年からアメリカ言語学会名誉会員。2006年からインド統計研究所言語学部局（コルカタ）に勤務。

トトク・スハルディアント

インドネシアの諸言語のなかのインドネシア語：その関係性の現状

本報告は今日のインドネシアの人々にとってのインドネシア語の地位に焦点をあてる。インドネシア語をインドネシアのその他の諸言語との関係で、またインドネシア国内の諸地域および他の国で使われるマレー語の諸方言との関係で検討するのが、本報告の課題である。

Totok Suhardijanto 慶應義塾大学総合政策学部訪問講師。1993年以降、インドネシア大学人文学部でインドネシア語の統語論、形態論、神経言語学の教鞭をとる。現在の主な研究領域は批判的言説分析（CDA）およびコーパス言語学。2002年から2004年および2005年から現在まで慶應義塾大学でインドネシア語および文化を教えている。

楊 志強

中国の少数民族の言語教育と言語政策の現状：ミャオ族を例に

本報告は主に中国少数民族の言語政策、及びその現状について論じるものである。具体的には中国のミャオ族を例にして、80年代以降、改革開放政策のもとで、ミャオ族社会の言語使用、及びバイリンガル教育の状況を紹介したうえ、また、ミャオ族知識人たちによる文字統一を巡る議論とその背景について検討する。

YANG Zhiqiang 日本学術振興会外国人特別研究員、東京大学客員研究員。2005年に東京大学大学院総合文化研究科地域文化専攻博士号を取得、2006年に中国貴州省貴州大学人類学研究所教授、また同大学日本研究所所長を担当。2006～2008年、日本学術振興会の「外国人特別研究員」として再来日、東京大学で「中国愛国主義教育と少数民族社会」をテーマにして研究を行っている。研究分野は文化人類学と歴史学、主に現代中国少数民族社会の変容及びアイデンティティなどの問題に集中している。

平高 史也

多言語社会日本の挑戦：外国人支援を超えて

本発表では、日本における言語政策の課題を在住外国人の言語権という視点からとらえ、この問題が在住外国人にとどまらず、マジョリティである日本人の問題でもあることを指摘する。在住外国人の言語権を、日本語の学習と母語の維持という2つの側面からとらえると、日本語教育と母語教育の重要性が浮かび上がってくる。外国人に言語教育を行う場合には、彼らの母語に関する知識は不可欠である。また、多言語多文化化が進行しつつある今日の日本では、いながらにして異言語や異文化に触れる機会が増えている。こういった機会をとらえて、受け入れ側に立つ日本人の意識を変え、外国語教育を見直そうという動きが少しずつ見られるようになってきている。本発表では、公立小学校での実験授業などの例を挙げながら、在住外国人の増加にともなう「内なる国際化」の進行が外国語教育の改革にもつながっていることを示す。

HIRATAKA Fumiya 慶應義塾大学総合政策学部教授。専門は社会言語学、外国語教育学、特に日本語とドイツ語に関する教育を研究。主要著書：*Der Erwerb der Temporalität im Japanischen als Zweitsprache* (München: iudicium, 2001)、『多言語社会と外国人の学習支援』慶應義塾大学出版会、2005年（共編）、『外国語教育のリ・デザイン』慶應義塾大学出版会、2005年（共編）。

マーク・フェテス

エスペラントはアジアの言語か：変動する言語生態系における成長要因と阻害要因

エスペラントはアジアの地で長い歴史を持っている。エスペラントの文化的・社会的意義をめぐる議論でしばしば忘れられがちな事実である。この歴史には政治、アイ

デンティティ、教育にかかわる側面があり、エスペラントはこれらの各側面を通じて言語と人々の相互関係が織り成す複雑なネットワークの中に特定の位置を占めている。このシステムが将来どのように推移するかを予測するには、エスペラントの普及を阻害する構造的な要因と、逆にその普及を促進する要因とを、それぞれ理解する必要がある。こうした分析は、エスペラントという言語の性格だけでなく、エスペラントを取り巻くより広い言語生態系にも光を投じるものとなろう。エスペラントはこの言語生態系の変動を示す、小さいけれども注目すべき指標であるからだ。

Mark FETTES バンクーバー（カナダ）にあるサイモン・フレーザー大学教育学教授。主な研究テーマは、先住民コミュニティにおける教育、学習と教育に果たす想像力の役割、言語政策と言語計画への生態学的アプローチなど。米国のエスペラント研究財団理事であり、社会的・政治的見地から見たエスペラントについて複数の研究論文を書いている。

■ コメント：庄司 博史

SHOJI Hiroshi 国立民族学博物館研究部教授。専門は言語学、多言語主義論、言語政策論。近年は、特に移民言語に関する研究に携わっている。主要著書：『事典 日本の多言語社会』岩波書店、2005年（共編）、『講座 世界の先住民族 ファースト・ピープルズの現在 ヨーロッパ』明石書店、2005年（共編）、『ことばの二〇世紀』ドメス出版、1999年（編著）。主要論文：“Multilingualization: A Breakthrough into Japanese Language Consciousness?” Joseph F. Kess et al. (eds.), *Changing Japanese Identities in Multicultural Canada* (University of Victoria, 2003) 所収。

Resumoj kaj Aŭtoroj*

I. Enkonduka Sesio

Prezidanto: Kimura Goro Christoph (Sophia-Universitato)

Jean-Claude Hollerich

Unua tutmondiĝo: eŭropa gramatiko en Azio

La greka-roma gramatiko estis aplikita pere de monakoj en Irlando kaj Anglio en la frua mezepoko kaj iĝis kristana gramatiko. Tiu latina gramatiko estis aplikita al modernaj eŭropaj lingvoj kaj tiel iĝis eŭropa gramatiko. Misiistoj aplikis tiun gramatikon al novaj lingvoj kiujn ili ekkonis en la 16a kaj 17a jarcentoj. Ili kreis tutmondan pri-lingvon, kiu ankoraŭ estas uzata hodiaŭ. Ni rigardu tiun teknologian revolucion de "gramatikigo" per ekzemploj de jezuitaj gramatikoj en Azio.

Jean-Claude HOLLERICH Jezuita pastro, ĉefo de la Departemento de Germanaj Studoj, direktoro de la Eŭropa Instituto, Sophia-Universitato. Preparas publikigon de jezuitaj leteroj el Tailando (17a jarcento). Li publikigis i.a.: "A Different Way of Dialogue" en *The Journal of Sophia Asian Studies* No.12 (1994); "Die Grammatik im Frühmittelalter" en *Chusei ni okeru jiyu gakugei no dentou* [La tradicio de liberalaj artoj en mezepoko] (1997); "Die französischen Jesuiten in Siam" en *Bulletin of the Faculty of Foreign Studies*, Sophia University, N.41 (2006).

Humphrey Tonkin

La Nitobe-procedo en azia kunteksto

La Nitobe-procedo ekestis el klopodo, kiu datiĝas de la 1960aj jaroj kaj estis fortigita de la kresko de socilingvistiko kaj lingvopolitikaj studoj, harmoniigi la urĝan bezonon de efikaj rimedoj de internacia komunikado kaj la dezirindecon de konservado de lingva diverseco. Jam okazis abunda planado suben – ekde la ĉefaj lingvoj al la egaleca aplikado de la malpli uzataj lingvoj – sed malmulta planado supren – de la ĉefaj lingvoj al egalecaj formoj de internacia lingva komunikado. La unua Nitobe-Simpozio okazis en 1996 en Prago, kaj sekvis simpozioj en Berlino (1999), Pekino (2004) kaj Vilno (2005). Oni emis doni atenton al lingvopolitiko en Eŭropo, precipe la Eŭropa Unio. Tamen, la nuna simpozio traktos la problemon de politiko rilate al la internacia uzo de lingvoj en Azio, temo apenaŭ tuŝata de politikistoj kaj relative malmulte studata de lingvistoj.

* Ĉiuj detaloj pri aŭtoroj laŭ la stato en aŭgusto 2007.

Humphrey TONKIN Universitata Profesoro de Humanecaj Studoj kaj Emerita Prezidanto de la Universitato de Hartford, Usono. Aldone al sia laboro pri angla literaturo kaj internaciaj interŝanĝoj, li multe verkas en la angla kaj en Esperanto pri aspektoj de lingva politiko kaj planado kaj li rolas kiel redaktoro, kun Probal Daŝgupto, de la faka revuo *Lingvaj Problemoj kaj Lingva Planado*. Li direktas la Centron de Esploro kaj Dokumentado pri Mondaj Lingvaj Problemoj.

Sato Masahiro

La interponta idearo de Nitobe Inazo kaj helplingvo

Mi asertas ke Nitobe konstruis 7 pontojn en sia 71-jara vivo; t.e. (1) ponto inter la Oriento kaj la Okcidento, (2) ponto inter kamparoj kaj urboj, (3) ponto inter studoj kaj ĉiutaga vivo, (4) ponto inter viroj kaj virinoj, (5) ponto inter klasikaĵoj kaj la moderna epoko, (6) ponto inter idealo kaj realo, kaj (7) ponto inter tempo kaj eterno. Fremdaj lingvoj estis la rimedo por tiuj pontoj. Kvankam li ne lernis Esperanton, li komprenis kvaronon aŭ duonon de la prezentaĵoj en Universala Kongreso de Esperanto. Sed Esperanto neniom konsideras la orientajn lingvojn. Jam venas tempo por alpreni neŭtralan artefaritan helpan lingvon por ĉiuj nacioj por egale esprimi sian penson por i.a. komercado, akademia interŝanĝo kaj realiĝo de eterna paco. Pasis 86 jaroj post ke Nitobe proponis tiun lingvan demokratismen. Sed ankoraŭ nun multaj popoloj precipe virinoj kaj infanoj suferas pro militoj surbaze de diskompreniĝo. Certe necesas nova ponto nun.

SATO Masahiro Naskiĝis en Osaka. Profesoris en Osaka Urba Universitato kaj Kansaja Fremdlingva Universitato. Nun li estas honora profesoro de Osaka Urba Universitato kaj estro de edukfako de Nitobe Fondaĵo. Lia studfako estas filozofio. Li verkis librojn pri la vivo kaj signifo de Nitobe en la nuna epoko, kaj ankaŭ pri Immanuel Kant, Yanaihara Tadao, Uchimura Kanzo, k.a. Li tradukis multajn librojn, i.a. *Bushido*.

II. Temprelegoj: Problemoj kaj defioj de lingva politiko en Azio

Prezidanto: Mark Fettes (Universitato Simon Fraser)

Kimura Goro Christoph

Internaciaj lingvoj, fremdaj lingvoj kaj minoritataj lingvoj: interrilateco de lingvaj problemoj

La rolojn, kiujn eŭropaj lingvoj ludas en Azio, oni povas dividi en kvar aspektojn: internacia lingvo, fremda lingvo, minoritata lingvo kaj nacia lingvo. Tiuj kvar aspektoj estas konekse interrilataj en duobla senco. Unue, unu sama lingvo ofte havas plurajn aspektojn. Due, ĉiu aspekto difinas sin kaj evoluas en rilato kun la aliaj aspektoj. Tamen, ĉar surface tiuj aspektoj koncernas malsamajn

funkciojn de lingvo aŭ aperas en malsamaj sociaj sferoj, eĉ en fakaj rondoj oni emas diskuti tiujn aspektojn tute aparte aŭ nur parte ligite. En mia kontribueto mi volas montri la neceson kune temigi ĉiujn aspektojn en lingvopolitikaj diskutoj. Ekzemplojn mi ĉefe ĉerpas el japana kunteksto.

KIMURA Goro Christoph, d-ro Vicprofesoro por germana lingvo kaj socio, Fakultato pri Fremdlandaj Studoj, Sophia-Universitato, Tokio. Esplorkampoj estas lingva sociologio, precipe lingvaj rajtoj kaj lingva politiko. Ĉefaj verkoj en la japana: *Rajto al lingvoj* (kunredaktis); *Kian rolon ludas la intenco ĉe lingvaj agoj?: Lingvo-konstruado kaj lingvaj ideologioj, traktitaj ĉe la ekzemploj de la soraba kaj kornvala lingvoj.*

Richard B. Baldauf

Sukceso kaj malsukceso en lingva plano por eŭropaj lingvoj en aziaj nacioj

Tiu ĉi studo ekzamenas la eblecojn kaj limojn de interveno en lingvaj politikoj en multaj reĝimoj en Orienta Azio. La enkonduko donas la fonon de la lingvo-plana situacio en la reĝimoj studataj, inkluzive kelkajn tabelojn kiuj provizas ĝeneralan observon de la lingva situacio kaj lingva politiko en tiu regiono. En la sekvantaj partoj individuoj el tiuj reĝimoj provizas specifajn ekzemplojn de sukceso kaj malsukceso en planado por eŭropaj lingvoj en tiuj reĝimoj. La lasta parto montras la komunajn punktojn, kiugrade interveno eblas aŭ limiĝas en la Orient-Azia regiono.

Richard B. BALDAUF Jr. Vicprofesoro de TESOL en la Fakolito de Edukado ĉe la Universitato de Queensland kaj membro de la Estraro de la Internacia Asocio de Aplikataj Lingvistikoj (AILA). Li publikigis multajn artikolojn en studgazetaro kaj libroj. Kunverkis kaj kunredaktis: *Language Planning and Education in Australasia and the South Pacific*, Multilingual Matters, 1990; *Viability of Low Candidature LOTE Courses in Universities*, DEET, 1995; *Language Planning from Practice to Theory*, Multilingual Matters, 1997; *Language and Language-in-Education Planning in the Pacific Basin*, Kluwer, 2003; *Planning Chinese Characters: Evolution, Revolution or Reaction*, Springer, 2008.

Tove Skutnabb-Kangas

Lingvaj Homaj Rajtoj (LHRj) en edukado: tro malmulte, tro malfrue?

Plejmultaj Indiĝenaj infanoj kaj multaj infanoj de minoritatoj en la mondo estas hodiaŭ edukitaj en la maniero karakterizata kiel lingva genocido, laŭ la difinoj de la Genocida Konvencio de Unuiĝintaj Nacioj, en Artikolo II(e), “perforte transmovi infanojn de la grupo al alia grupo,” kaj en Artikolo II(b), “kaŭzi seriozan korpan aŭ mensan vundon al membroj de la grupo” (<http://www.hrweb.org/legal/genocide.html>). La plej grava LHR por la ebleco de Indiĝenaj popoloj kaj minoritatoj por teni sin kiel aparta popolo/grupo en la epoko de “Edukado por Ĉiuj”, t.e. la rajto por edukado uzante sian gepatran lingvon kiel la ĉefa lingvo en

edukado, estas terure malriĉe protektata en internacia leĝo, kaj troviĝas amaso da rezisto el multaj landoj por malhelpi plibonon protektadon. Tiu ekzemplo estas la sorto de la Manuskripta Deklaracio pri la Rajtoj de Indiĝenaj Popoloj (por ĝisdata novaĵo, vidu <http://www.docip.org/>). Se Indiĝenaj kaj minoritaj lingvoj estas ne uzataj en edukado, en multaj kazoj tio kaŭzos malaperon/mortigon de la monda lingva diverseco. Ĉar lingva kaj kultura diversecoj ambaŭ reciproke rilatas, kaj plej probable ankaŭ rilatas kun (teno de) biografia diverseco, manko de LHRj en edukado minacas tenon de Tradiciaj Ekologiaj Konoj, kion nun sciencistoj rigardas kiel ofte pli ĝustaj konoj ol okcidentaj “sciencaj” konoj. Tiu ĉi studo levas la demandon: ĉu oni faras nun tro malmulte kaj tro malfrue por protekti LHRjn en edukado? Ĝi donos kelkajn ekzemplojn de pozitivaj progresoj en Azio.

Tove SKUTNABB-KANGAS, d-ro Universitato de Roskilde, Danio kaj Åbo Akademi Universitato, Finnlando. Verkis aŭ redaktis ĉirkaŭ 50 librojn kaj preskaŭ 400 artikolojn kaj libroĉapitrojn, en 31 lingvoj, pri edukado de minoritatoj, lingvaj homaj rajtoj, lingvaj genocidoj, subtraha disvastiĝo de la angla lingvo, ktp. Ŝi estis Linguapax premiinto en 2003. Vidu <http://akira.ruc.dk/~tovesk/>.

III. Podia Diskuto 1: La rolo kaj perspektivo de eŭropaj lingvoj en la evoluo de aziaj landoj

Prezidanto: Ulrich Lins

Ulrich LINS Studis historion, politikan sciencon kaj japanologion en Köln, Bonn kaj Tokyo. Lia doktora tezo estas pri Oomoto kaj japana naciismo. Estis dufoje estro de la Tokia Oficejo de Germana Servo por la Interŝanĝo de Universitatoj (DAAD). Verkis i.a. *La danĝera lingvo: studo pri la persekutoj kontraŭ Esperanto* (1988), tradukita en la germanan, italan, japanan, litovan kaj rusan lingvojn.

Hugo Cardoso

Kion signifas 'eŭropa'?: defio de intenskontaktaj variaĵoj por lingva klasifiko

Tiu ĉi referaĵo traktas diversajn kriteriojn en lingvistika etiketado, kun aparta konsidero de genetika taksonomio, kaj klarigas plejparte eksterlingvajn faktorojn kaj ties influon al klasifikado. Genetika klasifiko aparte kompleksiga kiam oni aplikas ĝin al intenskontaktaj variaĵoj, ĉar tipologie ili montras influojn de pluraj (ofte senrilataj) fonaj lingvoj. Analizo de kreolaj lingvoj kun portugaldevenaj vortoj en Azio, specife de la diua variaĵo de la hind-portugala, indikas, ke mankas sufiĉa apogo tipologie por apliki etiketon kiel 'eŭropa' al ili. Tia aplikado plue povus havi malbonan konsekvencon por integriĝo de la lingvoj al modernaj socioj en Azio kaj por lingva plutenado. Mi sugestas do, ke lingvistoj estu delikatsentaj pri la socia implicaĵo de taksonomiaj etiketoj kaj terminaroj.

Hugo CARDOSO Portugala lingvisto kaj laboras ĉe Unversitato de Amsterdam. Lia esploro ĝis nun fokusiĝis al kreolaj lingvoj, precipe tiuj kun portugaldevenaj vortoj. Li publikigis pri portugalaj elementoj en la saramakana lingvo kaj pri hind-portugalaj kreoloj. Li estas nun engaĝita en projekto por dokumenti kaj lingvistike priskribi la diua hind-portugala lingvo.

Sergey Anikeev

La rusa kulturo kaj la japana socio

Neniu lando en la mondo povas vivi kaj evolui sen kontaktoj kun siaj najbaroj, sen unuflanka aŭ duflanka influoj. Japanio ne estas escepto kaj la japanoj de pratempoj modernigis sian socian vivon ĉerpante sciojn de la pli alte evoluintaj landoj: de tri antikvaj Koreaj imperioj kiujn sekvis epoko de Ĉinio. Ties influoj penetris al Japanio poiomete dum longega tempo. Dank' al tio la alilanda influo ne estis akceptita kiel fremda por la japanoj. Sed post du jarcentoj de la izoleco el Eŭropaj landoj kaj Usono ŝtorme invadis fremda kulturo kiu renversis la estadon de la japanoj. Japanio speciale koncentriĝis je studoj pri ekonomiaj kaj politikaj sistemoj de tiuj landoj. En tiu ĉi senco tiutempe Rusio ne povis prezenti per si modelon por imitado kaj ne kapablis rivali. Sed la situacio estis tute alia rilate la spiritajn valorojn kaj precipe la kulturalan influon de Rusio al Japanio. Tiu ĉi studo prilumas tiun terenon de la kulturaj interfluoj pri kiuj en Japanio oni emas neglekti kaj malatenti pro respektivaj politik-ideologiaj konsideroj nestiĝintaj en la historio de ambaŭ landoj. Kiel ponto komence ekservis la rusa ortodoksa religio kiu semis la rusan lingvon inter la japanoj. Kia estis tiu rusa kultura invado kaj kion ĝi alportis al Japanio? Pri tio ĉi vi trovos inter tiuj ĉi linioj.

Sergey ANIKEEV Profesoro de la rusa lingvo kaj literaturo, For-Orienta Ŝtata Universitato (Vladivostok, Rusio), Filio en Japanio, Hakodate, vic-direktoro. Esplorkampoj estas fremdlingva instruado, religiaj aspektoj de socia vivo, interfluo de diverslandaj kulturoj. Aŭtoro de kelkaj lerniloj de la rusa lingvo por japanoj kaj tradukoj pri Ŝinto kaj Oomoto en la rusan.

Zegiimaa Choidon

La rolo de eŭropaj lingvoj en la evoluo de Mongolio: historio kaj estonteco

Estas historiaj dokumentoj, kiuj montras, ke en la dekdua kaj dektria jarcentoj mongoloj, kies teritorio vaste etendiĝis en centra Azio, studis kaj uzis fremdajn lingvojn inkluzive de eŭropaj. Tiu ĉi referaĵo koncize prezentos historian kaj nuntempan rolojn de eŭropaj lingvoj en la mongola socia vivo, kaj ankaŭ historion de la lernado de eŭropaj lingvoj en Mongolio, kiel la franca, germana, rusa kaj angla. Plie, mi pridiskutos mongolan lingvo-politikon rilate al eŭropaj lingvoj kaj ties praktika apliko en tiaj sferoj kiel politika, eduka, soci-ekonomia,

kaj ankaŭ en soci-komunikaj. Specifan atenton ricevos la rusa lingvo, kiu ludis enorman rolon en la socia vivo. Fine, mi prezentos mian propran opinion pri la estonta direkto de la lingvo-politiko pri eŭropaj lingvoj en Mongolio.

Zegiimaa Choidon, d-ro, Sc.D., profesoro. Prezidanto de la Nacia akademio por lingvo-politiko, direktoro de la esplor-projekto "Scienca bazo de la lingvo-politiko de la mongola registaro", mongol-flanka direktoro de la mongol-rusa komuna projekto "Naciaj lingvoj en la epoko de tutmondiĝo: Rusio kaj Mongolio". Dekano de postdiplomaj kursoj de la Universitato de Humanistiko. Ricevis doktorecon en 1992 kaj Sc.D. en 1998 ĉe Ruslingva Instituto je la nomo de A. S. Puŝkin en Moskvo. Esplor-interesoj: socilingvistiko, lingvo-politiko, pragmatika lingvistiko, parol-etiketo kaj -ĝentileco.

Ichinose Atsushi

Reviviĝo de la portugala en Azio

En la tempo de la granda navigado kaj geografiaj malkovroj la portugala lingvo funkciis kiel "lingua franca" inter eŭropanoj kaj lokaj indiĝenoj en Afriko kaj Azio. Ĝi kaj ĝiaj variaĵoj, ĉu piĝinaj aŭ kreolaj, estis "vehiklaj lingvoj" inter diversaj etnoj. Kvankam la disvastiĝo de la franca kaj la angla poste elpŭsis ilin el la pli granda parto de tiuj mondpartoj, nun, je la ŝanĝiĝo de jarcento, ni observas ĉefe du novajn evoluojn. Unue, Orienta Timoro, atinginta plenan sendependecon en 2002, adoptis la portugalan kiel unu el siaj du oficialaj lingvoj apud la tetuma, kreskigante la nombron de la portugallingvaj ŝtatoj. Due, kaj pli grave por la temo de mia parolo, la nombro de la japanaj brazilanoj, kiuj "gastlaboras" en la lando de siaj prapatroj, rapide kreskis de post la 1990aj jaroj: ĉirkaŭ 300 mil brazilanoj, kiuj parolas la portugalan kiel sian gepatran lingvon, nun vivas en Japanio. Mia parolo celas prilumi la signifon de la portugala por la nuntempa Japanio kaj, inverse, la signifon de la nuntempa Japanio por la portugala.

Atsushi ICHINOSE Profesoro de la Departamento de Luzo-Brazilaj Studoj en la Fakultato pri Fremdlandaj Studoj, Sophia-Universitato. Ĉefaj esplorareoj estas portugala lingvistiko kaj studoj pri piĝinaj kaj kreolaj lingvoj. Ĉefaj publikigitaj verkoj en la japana: *Per flugiloj de kreolaj ventoj: vojaĝo al Gvine-Bisaŭo*; *La portugala mondo: destino de la revo de oceana imperio*; *La portugala lingvo donas panoramon al la oceanoj*; *Mekanismo de la portugala lingvo*.

Izumi Kunihisa

La franca lingvo en la japana socio

Oni eklernis la francan lingvon por la unua fojo en la fino de la ŝoguna periodo de Tokugawa por militaj bezonoj. Post la Restaŭrado de Meiji, oni ĝin lernis kiel rimedon por enkonduki la sciojn kaj teknikojn militajn, jurajn kaj industriajn, kaj ankaŭ pro interesiĝo pri demokratismo kaj ideo de homaj rajtoj. Poste la

interesiĝo de la franclingvaj lernantoj turniĝis al literaturo, muziko kaj belarto, kaj ĉi tiu tendenco daŭras ĝis hodiaŭ. La influosfero de la franca lingvo en la japana socio estis limigita nur al ĝia elito. La lingvo mem apenaŭ donis rektan efikon al la japana socio ĝenerale. Nuntempe troviĝas amaso da franclingvaj vortoj en la stratoj kiel nomoj de vendejoj kaj varoj precipe relate al kuirajoj, sukeraĵoj, modo kaj kosmetiko. Ĉi tio estas novtipa fenomeno ligita al la amas-socio. Se oni permesas uzi la lertan vortumon de McLuhan, la franca lingvo ludas ĉi tie la rolon de “masaĝo” anstataŭ mesaĝo. En la hodiaŭa japana socio, plifortiĝas la kredemo, ke la angla plene funkcias en la tuta mondo, aŭ alivorte plivastiĝas la iluzio de unulingvismo (*monologisme*). Ĉu la franca lingvo povos averti kaj stimuli por ŝanĝi ĉi tian percepton, eble dependos de la lingvopolitiko kaj sinteno de Francio kaj Eŭropo.

IZUMI Kunihisa Profesoro, Departamento de Francaj Lingvo kaj Studoj, Fakultato pri Fremdlandaj Studoj, Sophia-Universitato. Ĉefaj esplor-temoj: franca lingvistiko, semantiko, sociolingvistiko; precipe, kompara lingvistiko inter la japana kaj la franca kaj ankaŭ la lingvaj problemoj rilatantaj al la unuiĝado de Eŭropo vidataj ĉefe en Francio, Belgio kaj Luksemburgio. Ĉefaj publikigaĵoj en la japana: *Franca lingvistiko de hodiaŭ* (kunverkis); *Kultura plurismo en la erao de tutmondiĝo* (kunverkis); *Promenejo de francaj vortoj*.

Usui Hiroyuki

Esperanto por ‘venki’ Eŭropon: soci-evoluisma situigo

Japanoj en la moderna epoko elmontris (kaj eble daŭre elmontras) ambivalentan sintenon al eŭropaj lingvoj, precipe la angla. Ili manifestis, unuflanke, tiom grandan amon al tiuj lingvoj, ke iuj eĉ proponis anstataŭigi sian etnan lingvon per unu el la eŭropaj lingvoj. Aliflanke, tamen, ili ankaŭ esprimis fortan malamon kontraŭ la angla, ke ili volis malpermesi ĝian lernejan instruadon aŭ publikan uzadon. Tiu ĉi ambivalento fontis fakte el la dilemo, kiun japanoj alfrontis: neceso alproprigi okcidentan civilizacion ĝuste por povi rezisti kontraŭ okcidentaj potencoj. Estas pro tiu dilemo, ke multaj japanoj interesiĝis pri Esperanto kies adopto povus doni al ili eblecon “venki” Eŭropon laŭ specifa interpretado de socia evoluismo.

USUI Hiroyuki Naskiĝis en 1967. Magistriĝis ĉe Aoyamagakuin-Universitato, Tokio. Stud-eduka fako de Japana Esperanto-Instituto. Kunredaktis libron pri lingvaj rajtoj, kunaŭtoris librojn pri multlingvismo kaj polaj studoj, verkis fakajn artikolojn pri lingvopolitikaj proponoj rilate al Esperanto kaj la angla en Japanio.

■ Komentoj: Tanaka Kacuhiko

TANAKA Kacuhiko Emerita profesoro de Hitotsubashi-Universitato. Li abunde publikigis pri lingvistiko kaj Mongolistiko. Liaj ĉefaj verkoj en la japana titoliĝas i.a.: *Lingvo kaj ŝtato; Kio estas lingvistiko; Esperanto; Relativigi ŝtatajn lingvojn; Ekologio de lingvoj; Enkonduko en lingvistikon el vidpunkto de diskriminaciaj esprimoj; Kio estas lingvo.*

* * *

■ Resumo de la antaŭa tago: Timothy Reagan

Timothy REAGAN Profesoro de Eduka Gvidanteco ĉe Centra Ŝtata Universitato de Connecticut en New Britain, Connecticut. Liaj interesoj en esplorado estas interalie eduka lingvopolitiko, fremdlingva edukado kaj edukado de kulturaj kaj lingvaj minoritat-grupoj. Li eldonis vaste en ĉiuj el ĉi tiuj kampoj, kaj lia plej lasta libro estas: *Critical Questions, Critical Perspectives: Languages and the Second Language Education* (Information Age Publishing, 2005).

IV. Podia Diskuto 2: La angla en Azio – enradikiĝo kaj kontraŭstaro

Prezidanto: A. Giridhar Rao

A. Giridhar RAO Naskiĝis en 1963, doktoriĝis pri la angla de la Universitato de Hajderabado, kie li gaste prelegas. Lia disertacio pri la sciencfikcio (1994) kondukis lin al la homemancipigaj eblecoj de Esperanto, tiu alia ido de la eŭropa Klerismo. Liaj interesoj inkluzivas ĵurnalismon pri lingvopolitkaj aferoj; redaktadon kaj dokumentadon ĉefe por neregistaraj organizaĵoj; kaj la komunikebelcojn de la interreta epoko. Li instruas Esperanton, kaj aktuale esperantigas la autobiografion de Mahatmo Gandhi. Kiel la Ĝenerala Sekretario de la landa asocio, li kunorganizas la 5an Azian Kongreson de Esperanto en Barato en februaro 2008.

Marek Koscielni

La kultivado de fremdlingva edukado en la japana kultura kunteksto

Ni trovas surprizan malabundon de verkoj en la angla, kiuj tuŝas japanan sperton pri fremdaj lingvoj kaj ĝia efiko sur la socia modernigo de Japanio. La studado de fremdaj lingvoj obligadis al japanoj analizi kaj adapti evoluon el aliaj landoj kaj utiligi tiun ĉi sciaron por iliaj propraj renovigoj science kaj teknike. Tiu ĉi referaĵo provas doni tutecan priskribon de socikultura kaj socilingva situacio rilate al fremdlingva edukado en la japana kultura kunteksto. La referaĵo enkorpiĝas kaj diakronan kaj sinkronan informon haveblan al la aŭtoro por fari takson de fremdlingva edukado en Japanio kaj efiko, kiun tio kaŭzis sur la procedo de socia modernigo.

Marek KOSCIELECKI Edukiĝis en Pollando, Nov-Zelando kaj Aŭstralio. Komence de la 1970aj jaroj studis la anglan kaj germanan ĉe Victoria-Universitato, Velingtono, Nov-Zelando. En 1984 magistriĝis pri aplika lingvistiko ĉe la lingvistika fako (tiam sub la gvido de prof. M. A. K. Halliday), Universitato de Sidnejo, kaj en 1996 doktoriĝis pri aplika lingvistiko ĉe Universitato Edith Cowan, Perto, Aŭstralio. Spertis instrui en meza kaj supera edukado. Nuntempe asista profesoro ĉe Malferma Universitato de Hongkongo.

Robert Phillipson

La nova lingvo-imperia ordo: lecionoj eŭropaj kun tutmonda signifo

Tutmonde pli kaj pli vastiĝas la uzo de la angla lingvo. En kontinenta Eŭropo (eŭrop-uniaj institucioj kaj membro-ŝtatoj) tio estas rekta rezulto de tutmondiĝo gvidata de usonaj firmaoj, militaj aktivecoj, kaj profundiĝanta integriĝo de Eŭropo. Eĉ prestiĝaj eŭropaj lingvoj (la franca, germana...) riskas esti degradigitaj kun ilia lingva kapitalo reduktita je valoro tra akumulaj procedoj, kiuj akordiĝas al la funkciado de la mondaj ekonomio, financo, amaskomunikiloj kaj altlerneja edukado. Tiuj kiuj scipovas la anglan ricevas malegale grandajn avantaĝojn kompare al la parolantoj de aliaj lingvoj. Esplorado pri la lingva nov-imperiismo, kaj alternativoj al ĝi bezonas ligiĝi al la formulado de multlingvaj politikoj sur niveloj supernacia, nacia kaj subnacia.

Robert PHILLIPSON Brito. Li studis ĉe la Universitatoj de Kembriĝo kaj Leeds, kaj doktoriĝis ĉe la Universitato de Amsterdamo. Li instruis la anglan lingvon en norda Afriko kaj orienta Eŭropo antaŭ ol migri al Danlando. Li nun estas profesoro ĉe Kopenhaga Lernejo pri Komerco. Ĉefaj verkoj: *Linguistic Imperialism*, Oxford University Press, 1992; *English-Only Europe?: Challenging Language Policy*, Routledge, 2003. Liaj esploraj interesoj estas: la rolo de la angla en tutmondiĝo, lingva nov-imperiismo, lingvaj rajtoj, sociolingvistiko, kaj lingvo-pedagogio. Por detaloj pri lia biografio kaj bibliografio informiĝu ĉe <http://www.cbs.dk/staff/phillipson> (kelkaj verkoj tie elŝuteblas).

Kawahara Toshiaki

Anglalingva edukado kaj lingvopolitiko en Japanio

Komparante Japanion kun ĝiaj aziaj najbaroj, oni ofte diras, ke Japanio postrestas dum Azio progresis en anglalingva edukado. Por doni kialon, oni ofte rimarkigas, ke la metodo instrui la anglan en Japanio havas problemojn. Kaj ofte oni masoĥisme mencias la poentojn de japanoj en TOEFL, kiuj estas malaltaj kompare kun tiuj en aliaj landoj. Tamen ĉi tio eble ne tiom estas la rezulto de iuj ajn problemoj en la metodo instrui la anglan, kiom la reflektado de la fakto, ke japanoj ĝis nun malmulte bezonis la anglan, do malmulte interesiĝis pri ĉi tiu lingvo. En Japanio, la japana plene funkcias. En ĉiuj kampoj, inkluzive de scienco kaj teknologio, administrado, leĝodonado, justico, amaskomunikado, edukado

kaj industrio, ĝi plene funkcias. En Japanio oni povas verki doktoran disertacion japane. Estus miskomprenige kompari Japanion kun aliaj landoj, en kiuj onia gepatra lingvo ne povas adekvate kovri ĉiujn fakajn kampojn, kaj priplori la malaltan povoscion de la angla ĉe japanoj. Konsiderante la fakton, ke en Japanio eblas legi diversajn verkojn de la mondo en japana traduko kaj plenumi taskojn en iu ajn kampo en la japana, la fakton, ke Japanio situanta en Azio nun spertas la plivigliĝon de interŝanĝoj, homaj kaj materiaj, kun siaj aziaj najbaroj, kaj la fakton, ke Japanio nun fariĝas multlingva socio kun la kresko de alilandaj loĝantoj enlande, ĉi tiu studo diskutos, kiel anglalingva edukado kaj lingvopolitiko estu antaŭenpuŝataj en Japanio.

KAWAHARA Toshiaki, Ph.D. Profesoro, Fakultato de Literaturo, Kioto-Koka Virina Universitato. Ĉefaj kampoj de esplorado: lingvopolitiko, anglalingva edukado kaj aziaj anglalingvoj. Ĉefaj verkoj en la japana: *Lingvopolitikoj tra la mondo* (redaktis); *Multlingvaj socioj alvenis* (kunredaktis); *Lingvoservo al alilandaj loĝantoj* (kunredaktis); *Anglalingvoj en Azio kaj Oceanio* (kunredaktis).

Feng Zhiwei

La rolo de la angla lingvo en Ĉinio

Ĉi tiu referaĵo priskribas la zigzagan akceptadon de la angla lingvo en Ĉinio kaj skizas la evoluon de la instruado de tiu ĉi lingvo en Ĉinio (inkluzive de la redaktado de anglalingvaj lernolibroj, la lingvonivelaj ekzamenoj k.a.). En la nuntempa Ĉinio la anglalingva instruado jam fariĝis industrio; pli kaj pli da ĉinoj emas ĝin lerni. Multlingvaj servoj estas grava aspekto de la Olimpiaj Ludoj en Pekino, 2008. La aŭtoro proponas plifortigi la instruadon kaj lernadon de la ĉina samtempe kun la angla. Kiel nome ekvilibrigi la instruadon de la angla kaj tiun de la ĉina? Jen tasko de lingvo-statusa planado en Ĉinio.

FENG Zhiwei Supera asociita esploranto kaj profesoro de informadika lingvistiko ĉe la Instituto de Aplika Lingvistiko, Ministrejo pri Edukado de Ĉina Popola Respubliko. Nun li estas Komisiita Profesoro en multaj universitatoj en Ĉinio, inkluzive de Pekina Universitato, la Universitato de Zhejiang, Ĉina Komunika Universitato, la Universitato de Heilongjiang. Li estas ankaŭ akademia konsilanto de la Nacia Ŝlosila Laboratorio de Desegno-Rekonado (NLPR, CAS), membro de la Normiga Komitato de la Ŝtata Lingva Komisiono, prijuĝulo de Ĉina Nacia Scienca Fondaĵo, prijuĝulo de la Nacia Fondaĵo pri Filozofio kaj Socia Scienco, konsilanto de la Trans-Eŭropa Lingvo-Rimeda Substrukturo (TELRI, EU), konsilanto de Honkonga Terminologia Asocio, membro de la Konsila Komitato de la Internacia Kongreso pri Lingvaj Rimedoj kaj Pritaksado (LREC), membro de la redakta komitato de *International Journal of Corpus Linguistics* (IJCL, Amsterdamo), *International Journal of Chinese and Computing* (IJCC, Singapuro), *Zhongguo Yuwen* [Ĉina Lingvo] (Pekino), *Zhongguo Keji Shuyuan* [Ĉina Gazeto pri Terminoj de Scienco kaj Tekniko] (Pekino). Li publikigis 22 monografiajn librojn kaj 200 sciencajn referaĵojn.

Joseph Errington

Koloniismo, naciismo kaj la disvastiĝo de lingvoj de plivasta komunikado

La norma indonezia lingvo estas nekutima nacia lingvo, ĉar ĝi estas dua lingvo por plimulto de indoneziaj civitanoj. Tiu ĉi referaĵo priskribas la nekutiman kolonian historion de tiu lingvo por starigi pli vastan demandon pri la diversaj eblecoj por parolantoj “alproprigi” lingvon. Ni ankaŭ pritraktos la pli antaŭnelongajn evoluojn de la indonezia kiel rezistilo kontraŭ la indonezia ŝtato en Orienta Timoro. Ambaŭ evoluoj estas prezentitaj por emfazi komplikajn politikajn kaj kulturajn dinamikojn, kiuj povus grande malsami inter situacioj, kiujn oni tamen kutime simple rigardos kiel similaj ekzemploj de lingva “disvastiĝo”.

Joseph ERRINGTON Profesoro de antropologio kaj internaciaj kaj regionaj studoj ĉe Yale Universitato en New Haven Connecticut, Usono. Li estas estro de la Konsilio pri Sud-orientaziaj Studoj ĉe Macmillan Centro. Plejparte liaj verkoj fokusigas lingvon kaj socian ŝanĝiĝon en Indonezio, precipe inter dulingvaj parolantoj de la indonezia kaj javaa lingvoj en sud-centra Java. Lia plej nova libro aperonta en aŭgusto 2007 ĉe eldonejo Blackwell estas *Linguistics in a Colonial World: A Story of Language, Meaning and Power*.

E. Annamalai

La angla en la lingvoekologio de Barato

Ni difinu lingvo-ekologion kiel aron da rilatoj inter komunumoj, serĉe al propraj interesoj, konstante reviziata per ludo de diversaj lingvoj. La rolo priludita de la angla en la lingvo-ekologio de Barato en la epokoj kolonia, ŝtat-centra kaj tutmondiĝanta: jen la ĉeftemo de tiu ĉi referaĵo. La angla estas novulo inter specioj, kiuj strebas havigi al si lokon kaj rolon en tiu ĉi ekologio, kaj tiuj loko kaj rolo jen estas kontestataj, jen tute priceditaj de aliaj lingvoj. En la konkurso por limigitaj riĉfontoj partoprenata de la angla kaj aliaj lingvoj de la lando bezonatas trovi kompletigan aliron al riĉfontoj. Tio estas defio, kiun alfrontas Barato kaj aliaj multaj landoj. La referaĵo priskribas tiun ĉi defion kaj diversajn reagojn en Barato. La demando estas, ĉu pluteneblas limo inter ekonomia kaj kultura pejzaĝoj. La evolu-disvolviĝo de interlingvaj rilatoj estos kontraŭmetata al planita multlingvismo, en kiu planado povas esti eksplicite realigata de la ŝtato, aŭ implicate de la merkato. Iliaj relativaj fortoj en la tutmondiĝanta merkato estos ankaŭ pridiskutataj.

E. ANNAMALAI Doktoriĝis pri lingvistiko ĉe Universitato de Chicago kaj estas eksa direktoro de Centra Instituto de Barataj Lingvoj, Majsoro, Barato. Nuntempe instruas ĉe Yale-Universitato. Lia vidpunkto pri lingvopolitiko kaj -programoj, ellaboritaj tra la jaroj de esplorado, integras la rolon de la registaro, komunumo kaj individuo rilate al lingvouzo kaj stabileco de multlingvismo. Tia vidpunkto esprimis artikolo "Reflections on a Language Policy for Multilingualism" (*Language Policy* 2: 2, 2003). La libro *Managing Multilingualism in India: Political and Linguistic Dimensions* (2001) prezentas gamon da liaj esploraj intereso. Unu el la ĉefaj esplor-intereso liaj, kuntenado de barata multlingvismo, nature kondukis lin al studado de la rolo kaj loko de la angla en Barato. Li publikigas pri la edukaj kaj politikaj aspektoj de la angla kaj lingvistikaj aspektoj de ĝia komunika uzo mikse kun la tamila. Li ankaŭ okupiĝas pri la kreado de datumbazo kaj vortaroj de barataj lingvoj, precipe la tamila.

Amri Wandel

La angla en la azia scienco

En la 20a jarcento la scienca kaj interreta revolucio influadis ĉiun aspekton de nia vivo. Ambaŭ revolucioj estis sekvataj de intensa disvastiĝo de la angla. La angla estas la ĉefa lingvo de sciencaj tezoj kaj konferencoj. Tiu procedo atingis ankaŭ orientan Azion. Ĉinaj kaj japanaj sciencistoj, kiuj ofte gvidas la sciencajn evoluojn, publikigas siajn tezojn ĉefe en la angla. Multaj sciencaj konferencoj okazas en orienta Azio kaj ĉiuj havas la anglan kiel ĉefan aŭ solan konferencan lingvon. Mi rigardos tiujn tendencojn el mia propra sperto kaj komparos ilin kun la sinteno de esperantistoj kontraŭ la hegemonio de la angla.

Amri WANDEL Naskiĝis en 1954, loĝas en Israelo. Profesie li estas profesoro pri astrofiziko en la universitato de Jerusalemo. Specialisto pri aktivaj galaksioj nigraj truoj kaj astrobiologio. Li doktoriĝis pri astrofiziko en Stony Brook, Novjorko, estis docento en la universitatoj de Princeton, Maryland kaj Stanford kaj gastprofesoro en UCLA. Membro de la Akademio de Esperanto ekde 1992. Profesoro en la Akademio Internacia de la Sciencoj.

■ Komentoj: Yoshitake Masaki

YOSHITAKE Masaki Vicprofesoro ĉe la Kurso de Anglalingva Edukado, Eduka Universitato de Fukuoka. Fako: studoj pri komunikado. Studtemo: interkultura/internacia komunikado per la angla, rilate kun anglalingva edukado. Verkoj en la japana: *Multkultura socio kaj interkultura komunikado* (kunverkis); *Studoj pri nuntempa komunikado* (kunverkis); *Anglalingva edukado en la 21a jarcento* (kunverkis).

V. Podia Diskuto 3: Identeco, lingvaj rajtoj kaj transnaciismo en Azio

Prezidanto: Humphrey Tonkin (Universitato de Hartford)

Probal Dasgupta

La vivanteco de la gepatraj lingvoj: uzi la tradukadon kiel kultivilon

En ĉi tiu studo estas proponate, ke tio, kion la lingvoplanistoj nomas la kultivado – kiu laŭ ili ludu gravan rolon por konservi la vivantecon de lingvo en siaj neperditaj uzterenoj – devas lanĉi interfekundigan rilaton kun aktualaj ideoj en la tradukistiko. La strategio krei ĉirkau la gepatra lingvo la strukturon de fortikaĵo ĉefiganta iun privilegian au klasikan tekstaron malpli efike helpas la komunumon ol strategio de maksimumigo de la komunika diafaneco. Tiu ĉi ideo eĥas specifan aliron (substancisman) en la sfero de la tradukistiko, kies renkontiĝejo kun la lingvoplanado jam de longe atendas seriozan kultivadon.

Probal DASGUPTA Doktoriĝo 1980, nov-jorka universitato, genera sintakso. Instruis la lingvistikon en Nov-Jorko, Melburno, Kolkato, Puneo, Hajderabado, kaj Esperanton en Barlastono (Britio) kaj San-Francisko. Kunredaktas *Language Problems and Language Planning*. Ĉefaj verkoj: *The Otherness of English* (1993), *After Etymology* (2000), tradukoj de kvar romanoj en Esperanton kaj unu el Esperanto. Vicprezidanto de la Akademio de Esperanto de 2001, honora membro de la Lingvistika Societo de Usono de 2004. Laboras en la Lingvistika Esploro en la Barata Statistika Instituto, Kolkato de 2006.

Totok Suhardijanto

La indonezia inter aliaj lingvoj en Indonezio: repensi la aktualan rilaton inter la indonezia kaj aliaj lingvoj

En ĉi tiu kontribuo mi volas fokusigi al aktuala statuso de la indonezia inter la tiea popolo. Diskutataj estos la rilato de la indonezia lingvo kun aliaj lokaj lingvoj en Indonezio kaj en rilato kun aliaj Malajaj dialektoj, kiuj estas uzataj en indoneziaj regionoj aŭ aliaj ŝtatoj.

Totok Suhardijanto Vizita docento ĉe Keio Universitato SFC. Post gradiĝo li instruis en Fakultato de Humansciencoj ĉe Universitato de Indonezio ekde 1993. Li instruas indonezian sintakson, morfologion kaj neŭrolingvistikon. Sed nun liaj ĉefaj esplorkampoj estas kritika diskursa analizo kaj korpusa lingvistiko. 2002-2004 kaj ekde 2005 li instruas la indonezian lingvon kaj kulturon ĉe Keio Universitato.

Yang Zhiqiang

Lingva situacio de ĉinaj naciaj malplimultoj: ekzempla kazo de mjaŭoj

Ĉi tiu referaĵo traktas ĉefe la lingvan politikon de Ĉina Popola Respubliko rilate al ĝiaj minoritataj etnoj (nacialplimultoj) kaj ties nuna situacio. Prezentiĝas ekzempla kazo de la ĉinaj mjaŭoj (hmongoj), prilumante la uzadon de lingvoj en la mjaŭa (hmonga) socio sub la reforma malfermiĝ-politiko de post la 1980aj jaroj kaj la tian dulingvan edukadon. Ankaŭ diskutiĝas la argumentoj de la mjaŭaj (hmongaj) intelektuloj pri la unuigo de skribsistemoj por la mjaŭa (hmonga) kune kun ilia fono.

YANG Zhiqiang Fremdlanda asociita esploranto, Japana Societo por Evoluo de Scienco; vizitanta esploranto, Universitato de Tokio. Doktoriĝis en 2005 pri regionaj kulturoj ĉe la Fako de Ampleksaj Kulturaj Studoj (magistraj-doktoraj kursoj), Universitato de Tokio. Profesoro, Instituto pri Antropologio kaj ĝenerala direktoro, Instituto pri Japanaj Studoj, Universitato de Guizhou, Provinco Guizhou, Ĉinio en 2006. Estante en Japanio por la periodo 2006-2008 kiel fremdlanda asociita esploranto de Japana Societo por Evoluo de Scienco, li okupiĝas pri la studo de "Patriotisma edukado en Ĉinio kaj la socioj de minoritataj etnoj" ĉe la Universitato de Tokio. Ĉefaj studkampoj: kultura antropologio kaj historio, precipe la transformiĝo de la nuntempaj socioj de minoritataj etnoj en Ĉinio kaj iliaj identecoj.

Hirataka Fumiya

Defioj por Japanio kiel multlingva socio: helpo ne estas nur por alilandanoj

Ĉi tiu studo aliros al la demando de lingvopolitiko en Japanio el la vidpunkto de lingvaj rajtoj por alilandanoj loĝantaj en Japanio kaj rimarkigos, ke ĉi tiu demando temas ne sole pri la enlandaj alilandanoj, sed ankaŭ pri la majoritataj japanoj. Kiam la lingvaj rajtoj de tiuj alilandanoj estas rigardataj el du anguloj, t.e., la lernado de la japana kaj la plutenado de la denaskaj lingvoj, tiam reliefiĝas la graveco de japanlingva edukado kaj denasklingva edukado. Por instrui la japanan al ili, nemalhavebla estas la kono pri iliaj denaskaj lingvoj. Krome, en la nuntempa Japanio, kiu fariĝas pli kaj pli multlingva kaj multkultura, kreskas la okazo kontaktiĝi kun fremdaj lingvoj kaj kulturoj enlande. Profitante tian okazon, iom post iom videbliĝas la klopodo ŝanĝi la konscion de la japanoj kiel akceptantoj kaj reekzameni fremdlingvan edukadon en ĉi tiu lando. Citante ekzemplon de eksperimenta leciono en publika elementa lernejo, ĉi tiu studo montros, ke la progreso de "interna internaciigo", kiun alportas la plimultiĝo de enlandaj alilandanoj, kondukas ankaŭ al reformado de fremdlingva edukado en Japanio.

HIRATAKA Fumiya, d-ro Profesoro, Fakultato de Politik-Mastrumado, Universitato Keio ĉe Shonan, Fujisawa. Ĉefaj kampoj de esplorado: socilingvistiko, fremdlingva edukado kaj esplorado (precipe la japana kaj germana kiel dua lingvo). Ĉefa verko: *Der Erwerb der Temporalität im Japanischen als Zweitsprache*, München: iudicium, 2001; libroj en la japana: *Multlingva socio kaj stud-asistado de alilandanoj* (kunredaktis); *Replanado de fremdlingva edukado* (kunredaktis) k.a..

Mark Fettes

Esperanto, ĉu azia lingvo?: kreskigaj kaj limigaj faktoroj en evoluanta interlingva ekosistemo

Esperanto havas longan historion en Azio, fakto ofte neglektata en diskutoj pri ĝia kultura kaj socia signifo. Tiu historio havas politikan, identecan, kaj edukan dimensiojn, kiuj lokas la lingvon ene de kompleksa reto de lingvaj kaj homaj interrilatoj. Se oni volas prognozi la estontan evoluon de tiu sistemo, oni bezonas kompreni la strukturajn faktorojn kiuj limigas la kreskon de Esperanto, same kiel la faktorojn kiuj pelas ĝian disvastiĝon. Tia analizo ne nur prilumas la ecojn de Esperanto kiel lingvo, sed ankaŭ la pli vastan lingvan ekosistemon en kiu ĝi konsistigas malgrandan sed atentindan indicon de sistemaj ŝanĝoj.

Mark FETTES Profesoro pri edukado ĉe Universitato Simon Fraser en Vankuvero, Kanado. Liaj esploroj koncernas i.a. edukadon en indiĝenaj komunumoj, la rolon de la fantazio en lernado kaj instruado, kaj ekologiajn alirojn al lingva politiko kaj lingvoplanado. Li estas estrarano de la usona Esperantic Studies Foundation kaj aŭtoro de pluraj fakaj artikoloj pri sociaj kaj politikaj aspektoj de Esperanto.

■ Komentoj: Shoji Hiroshi

SHOJI Hiroshi Profesoro de la esplora fakto de la Nacia Muzeo pri Etnografio. Specialaj intereskampoj: lingvistiko, multlingvismo kaj lingvaj politikoj. La ĉefa esplortemo dum la lastaj jaroj: la lingvoj de enmigrintoj. Ĉefaj verkoj en la japana: *Enciklopedieto pri multlingva socio de Japanio* (kunredaktis); *La aŭtoktonaj popoloj de la mondo: Eŭropo* (kunredaktis); *La lingva aspekto de la 20a jarcento*; en la angla: "Multilingualization: A Breakthrough into Japanese Language Consciousness?" in Joseph F. Kess et al. (eds.), *Changing Japanese Identities in Multicultural Canada*, University of Victoria, 2003.

Abstracts and Authors*

I. Opening Session

Chair: Kimura Goro Christoph (Sophia University)

Jean-Claude Hollerich

First Globalization: European Grammar in Asia

The Greek-Roman Grammar was adapted by the monks in Ireland and England in Early Middle Ages and became a Christian Grammar. This Latin Grammar got adapted to modern European languages and thus became a European Grammar. The missionaries adapted this grammar again to the new languages they discovered in the 16th and 17th centuries. They produced a global meta-language still in use today. We shall present this technological revolution of “grammatisation” giving the examples of Jesuit grammars in Asia.

Jean-Claude HOLLERICH Jesuit priest, Chair of the Department of German Studies, Director of the European Institute, Sophia University. Prepares the publication of Jesuit letters from Thailand (17th Century). Publications include: “A Different Way of Dialogue” in *The Journal of Sophia Asian Studies* No.12 (1994); “Die Grammatik im Frühmittelalter” in *Chusei ni okeru jiyu gakugei no dentou* [The Tradition of the Liberal Arts in the Middle Ages] (1997); “Die französischen Jesuiten in Siam” in *Bulletin of the Faculty of Foreign Studies*, Sophia University, N.41 (2006).

Humphrey Tonkin

The Nitobe Process in the Asian Context

The Nitobe process arose out of an effort, going back to the 1960s and reinforced by the growth of sociolinguistics and language policy studies, to reconcile the urgent need for effective means of international communication with the desirability of maintaining linguistic diversity. There had been plenty of planning downwards – from the major languages to the equitable application of lesser-used languages – but very little planning upwards – from the major languages to equitable modes of international linguistic communication. The first Nitobe Symposium took place in 1996 in Prague and was followed by symposia in Berlin (1999), Beijing (2004), and Vilnius (2005). Much of the focus was on language policy in Europe, particularly the European Union. The present symposium, however, will address the question of policy on the international use of

* All details about authors as of August 2007.

languages in Asia, a subject barely touched upon by politicians and relatively little studied by linguists.

Humphrey TONKIN University Professor of the Humanities and President Emeritus at the University of Hartford, USA. In addition to his work on English literature and on international exchange, he has written extensively in English and Esperanto on aspects of language policy and planning and he serves as editor, with Probal Dasgupta, of the journal *Language Problems and Language Planning*. He chairs the Center for Research and Documentation on World Language Problems.

Sato Masahiro

Nitobe Inazo's Idea of Bridging, and the Role of an Auxiliary Language

I state that Nitobe built 7 bridges in his 71 years life; i.e. (1) bridge between the East and the West, (2) bridge between farm villages and cities, (3) bridge between studies and daily life, (4) bridge between men and women, (5) bridge between classics and modern times, (6) bridge between ideal and real, and (7) bridge between time and eternity. Foreign languages were the means for those bridges. Although he did not learn Esperanto, he understood a quarter or a half of the presentation in Universal Congress of Esperanto. But Esperanto considers no oriental languages. Time has come to adopt a neutral artificial language as an auxiliary language for all nations to equally explain their thoughts for such as commerce and trade, academic exchange, and realizing eternal peace. 86 years passed after Nitobe proposed this linguistic democracy. But still now many people especially women and children suffer from wars based on misunderstanding. A new bridge is really needed now.

SATO Masahiro Born in Osaka. He was a professor in Osaka City University and Kansai Gaidai University. Now he is a honorary professor of Osaka City University and the chief of the educational section of Nitobe Foundation. His studying area is philosophy. He published books about the life and contemporary significance of Nitobe Inazo and also on I. Kant, Yanaihara Tadao, Uchimura Kanzo, etc. He translated many books, including *Bushido*.

II. Keynote Session: Problems and challenges of language policy in Asia

Chair: Mark Fettes (Simon Fraser University)

Kimura Goro Christoph

International Languages, Foreign Languages and Minority Languages: Interrelatedness of Language Problems

The roles European languages play in Asia can be divided in four aspects: international language, foreign language, minority language and national language. These four aspects are closely related mutually. Firstly, the same language has often several aspects. Secondly, each aspect is defined in relation to the others and develops closely interrelated with the other aspects. But probably because every aspect seems to be concerned with different functions of language and appears in different social domains, often one aspect is discussed wholly in isolation from the others, or only partly linked. The intention of my paper is to show the necessity of keeping in mind together all aspects in language policy discussion. Examples are drawn from the Japanese context.

KIMURA Goro Christoph, Ph.D. Associate Professor, Department of German Language and Studies, Faculty of Foreign Studies, Sophia University. Main areas of research: sociology of language (especially the social functions of second and foreign languages, revival and revitalisation of minority languages). Major publications in Japanese include: *Rights towards Languages* (coeditor); *Beyond Linguistic Modernity: Learn to Live in a Multilingual Society* (coauthor); *What Does "Artificiality" Mean to Language?: The Case Studies of Cornish and Sorbian as Exemplars of Language Construction and Language Ideology*.

Richard B. Baldauf

Successes and Failures in Language Planning for European Languages in Asian Nations

The possibilities and limits of intervention in language policies (LP) in a number of polities in East Asia are examined. First the background to the language planning situation in those polities is given using summary tables that provide an overview of the language situation and language policy in the region. Then, eight polity specific examples of successes and failures in planning for European languages are given. Finally, the common threads are drawn together on the extent to which intervention in LP is possible or is limited in the East Asian region.

Richard B. BALDAUF Jr. Associate Professor of TESOL in the School of Education at the University of Queensland and a member of the Executive of the International Association of Applied Linguistics (AILA). He has published numerous articles in refereed journals and books. He is coeditor of *Language Planning and Education in Australasia and the South Pacific* (Multilingual Matters, 1990), principal researcher and editor for the *Viability of Low Candidature LOTE Courses in Universities* (DEET, 1995) and coauthor with Robert B. Kaplan of *Language Planning from Practice to Theory* (Multilingual Matters, 1997) and *Language and Language-in-Education Planning in the Pacific Basin* (Kluwer, 2003). He is coauthor with Zhao Shouhui of *Planning Chinese Characters: Evolution, Revolution or Reaction* (Springer, 2008).

Tove Skutnabb-Kangas

Linguistic Human Rights (LHRs) in Education: Too Little Too Late?

Most Indigenous children and many minority children in the world are today educated in a way that can be characterized as linguistic genocide, according to the definitions of genocide in the United Nations Genocide Convention's Article II(e), "forcibly transferring children of the group to another group," and in Article II(b), "causing serious bodily *or mental* harm to members of the group" (<http://www.hrweb.org/legal/genocide.html>; emphasis added). The most important LHR for the possibility of Indigenous peoples and minorities to maintain themselves as distinct peoples/groups in the age of EFA (Education For All), namely the right to education using their mother tongues as the main teaching languages, is extremely poorly protected in international law, and there is massive resistance from many states to prevent a better protection. An example is the fate of the Draft Declaration on the Rights of Indigenous Peoples (for latest news, see <http://www.docip.org/>). If Indigenous and minority languages are not used in education, this will in many cases lead to the disappearance/killing of the world's linguistic diversity. Since linguistic and cultural diversity is both correlationally and most probably also causally connected to (the maintenance of) biodiversity, the lack of LHRs in education is disastrous to the maintenance of TEK (Traditional Ecological Knowledge) which is now seen by scientists as often more accurate than western "scientific" knowledge. The paper will ask the question: is what is being done today to protect LHRs in education too little and too late? Some examples from Asia of positive developments will be given.

Tove SKUTNABB-KANGAS, Ph.D. University of Roskilde, Denmark and Åbo Akademi University, Finland. Wrote or edited around 50 books and almost 400 articles and book chapters, in 31 languages, about minority education, linguistic human rights, linguistic genocide, subtractive spread of English, etc. She was the Linguapax award recipient in 2003. For publications, see <http://akira.ruc.dk/~tovesk/>.

III. Panel Session 1: The role and perspective of European languages in modern Asia

Chair: Ulrich Lins

Ulrich LINS, Ph.D. Studied history, political science and Japanese studies at the Universities of Cologne, Bonn and Tokyo. Former Director of the Tokyo Office of the German Academic Exchange Service (DAAD). Books and articles on problems of nationalism and internationalism, German-Japanese relations, higher education in Germany and Asia.

Hugo Cardoso

The Meaning of 'European': The Challenge of High-Contact Varieties for Linguistic Taxonomy

This article addresses the multiplicity of criteria involved in linguistic labelling, in particular with regard to the establishment of genetic taxonomies, and points out the largely extralinguistic considerations often involved in the resulting classifications and terminology. The matter of genetic classification is particularly complex when dealing with high-contact varieties, as their typological traits are likely to unveil the influence of a number of (often unrelated) ancestral languages. An analysis of the Portuguese-lexified creoles of Asia, in particular the Diu variety of Indo-Portuguese, not only makes it clear that applying the 'European' label to them is only weakly supported by typological evidence but can have detrimental consequences for the languages' social embedding in modern Asian societies as well as their maintenance. All these factors considered, it is suggested that linguists apply taxonomical labels only sparsely and clearly motivated, demonstrating sensitivity to the social echoes and possible implications of their terminology.

Hugo CARDOSO Portuguese linguist affiliated to the University of Amsterdam. His work has so far focused on creole languages, namely those with lexical input from Portuguese. He has published on the Portuguese element in Saramaccan and, more recently, on the Indo-Portuguese creoles. He is currently involved in a research project aiming at the documentation and linguistic description of Diu Indo-Portuguese.

Sergey Anikeev

Russian Culture and Japanese Society

No country in the world can exist and develop without any contact with its neighbours, without any influence in one-way or two-way. Japan is no exception and the people in ancient Japan modernised their social life drawing knowledge from the more developed countries: i.e. three ancient Korean empires, followed by the Chinese era. As the influence from these countries had gradually

penetrated into Japan over a very long period, it was not felt to be foreign to the people. After two centuries of isolation from European countries and the United States, however, a flood of foreign cultures invaded and turned the life of the Japanese completely over. Japan started to concentrate especially on the study of economic and political systems of these countries. In this sense, at the time, Russia could not present itself as a model to be imitated, nor could even compete. But the situation was totally different regarding spiritual values, especially the cultural influence of Russia over Japan. This study sheds light on the cultural confluence which tends to be neglected and overlooked in Japan because of respective political ideologies haunting the history of both countries. Initially, the Russian Orthodox Church served as a bridge which disseminated the Russian language among the Japanese people. It will be discussed what this cultural invasion of Russia was like, and what it brought about in Japan.

Sergey ANIKEEV Professor of the Russian language and literature at the Hakodate branch of Far-Eastern State University (Vladivostok, Russia) in Japan. His areas of research include religious aspects of a social life, mutual cultural influence. He is an author of several materials concerning learning and teaching of the Russian language and some translations from the Japanese on Shinto and Oomoto.

Zegiimaa Choidon

The Role of European Languages in the Development of Mongolia: Past and Future

There are a number of historical documents of the 12th and 13th centuries which show the evidence of Mongolia, situated in the Central Asia, studying and using foreign languages including European languages. This report will briefly introduce the historical and contemporary role of European languages in Mongolian social life as well as the history of studying European languages such as French, German, Russian and English in Mongolia. Furthermore, the Mongolian language policy on European languages and its implementation in the political, educational, social economic, and as well as in certain social communication spheres with particular emphasis on Russian language, which has played an enormous role in social life, will be discussed. Finally, the future trend of language policy in Mongolia on European languages will be presented with my own point of view.

Zegiimaa Choidon, Ph.D., Sc.D., Professor President of the National Academy for Language Policy. General manager of a research project "Scientific Basis of Language Policy of Mongolian Government", and also a Mongolian manager of the Mongolian and Russian joint project "National Languages in the Era of Globalization: Russia and Mongolia". Dean of Graduate school of University of the Humanities. She earned her Ph.D. in 1992 and Sc.D. in 1998 in Russian Language Institute named after A. S. Pushkin in Moscow, Russia. Her research interests are mainly on sociolinguistics, language policy, pragmalinguistics, speech etiquette and politeness.

Ichinose Atsushi

Revival of the Portuguese Language in Asia

It is widely known that in the era of Discoveries, Portuguese functioned as a lingua franca between the Europeans and the local inhabitants in Africa and Asia. Whether or not the variety used there was a pidginized or creolized one, Portuguese was certainly an important “vehicular language” between different ethnic groups. Gradually, although Portuguese began to recede before the proliferation of French and English, a new movement has been observed in the beginning of the 21st century. For example, on gaining independence in 2002, East Timor adopted Portuguese as one of two official languages alongside Tetum, thereby increasing the number of officially Portuguese-speaking countries. Furthermore, and more significantly in the content of this paper, we should not forget that since the 1990s, the flow of Nikkei Brazilians searching for work in Japan has been increasing. Now approximately 300,000 Brazilian people, who are speakers of Portuguese as their mother language, live in Japan. This paper will consider what Japan signifies for the Portuguese language and vice versa.

Atsushi ICHINOSE Professor, Department of Luso-Brazilian Studies, Faculty of Foreign Studies, Sophia University. Main areas of research: Portuguese linguistics, pidgin and creole studies. Main publications in Japanese include: *Riding on Creole Wind: A Trip to Guinea-Bissau*; *The Portuguese World: Destiny of Dream of a Seabourne Empire*; *From the Portuguese Language We Can See the Oceans*; *Mechanism of the Portuguese language*.

Izumi Kunihiisa

The French Language in Japanese Society

The French language was learnt by Japanese for the first time in the end of the Tokugawa shogunate period for military needs. After the Meiji Restoration, it was learnt as a tool for introduction of military, legal, industrial knowledge and skills as well as for the interests in the ideas of democracy and human rights. Thereafter the main interests of the French learners shifted to literature, music and fine art, and this tendency remains until today. The influence on the Japanese society exercised by French had a limited nature relevant only to its elite. The language itself hardly gave any direct impact to the Japanese society in general. Currently one can see a flood of French words in town used as names of shops or merchandise especially in relation to cuisine, confectionery, fashion and cosmetics. This is a new kind of phenomenon linked to the mass society. If we are allowed to borrow a shrewd wording by McLuhan, French is playing here the role of “massage” instead of message. In today’s society in Japan, the belief in English as the world language is reinforced, or in other words a kind of illusory *monologisme* (mono-

lingualism) is spreading out. Whether the French language can give warning and stimulus to change such perception may depend upon the language policy and attitude of France as well as Europe.

IZUMI Kunihisa Professor, Department of French Language and Studies, Faculty of Foreign Studies, Sophia University. Main areas of research: French linguistics, semantics and sociolinguistics. Major publications in Japanese include: *La linguistique française d'aujourd'hui* (coéditeur); *Cultural Pluralism in the Global Age* (coeditor); *Flânerie dans le jardin des mots*.

Usui Hiroyuki

Esperanto to 'Overcome' Europe: Social Evolutionary Interpretation in Japan

In the modern epoch Japanese have shown highly ambivalent attitude toward European languages, specifically English. On the one hand they revealed such strong love toward those languages that some of them even proposed to replace their own ethnic language with one of the European languages. On the other, though, they also expressed huge hatred against English so that they tried to ban the teaching or public usage of this language. This ambivalence is due to the dilemma Japanese faced: the necessity to learn Western civilization in order to resist Western powers. The same dilemma led Japanese to take interest in Esperanto, whose adoption would have given them the possibility to “overcome” Europe according to the specific interpretation of social evolutionism.

USUI Hiroyuki Born in 1967. Received Master's degree from Aoyamagakuin University, Tokyo. Section on Research and Education, Japan Esperanto Institute. Coedited a book on language rights, and coauthored books on multilingualism and Polish studies, wrote papers on language policy proposals on Esperanto and English in modern Japan.

■ Comments: Tanaka Kacuhiko

TANAKA Kacuhiko Professor Emeritus at Hitotsubashi University. The areas of research are linguistics and Mongolian studies. He has published numerous books in Japanese including: *Language and State; What is Linguistics; Esperanto; Relativising State Languages; Ecology of Language; Introductory Linguistics: An Approach from Discriminatory Expressions; What is Language*.

* * *

■ Summary comments on the first day: Timothy Reagan

Timothy REAGAN Professor of Educational Leadership at Central Connecticut State University in New Britain, Connecticut. His research interests include educational language policies, foreign language education, and the education of cultural and linguistic minority groups. He has published extensively in all of these areas, and his latest book is: *Critical Questions, Critical Perspectives: Languages and the Second Language Education* (Information Age Publishing, 2005).

IV. Panel Session 2: English in Asia – indigenization and objections

Chair: A. Giridhar Rao

A. Giridhar RAO Born in 1963, has a doctorate in English from the University of Hyderabad where he is guest faculty. His dissertation on science fiction (1994) led him to the emancipatory possibilities of Esperanto, that other child of the European Enlightenment. His interests include journalism on language policies and politics; editing and documentation, mainly for nongovernmental organizations; and the communication possibilities of the internet age. He teaches Esperanto and is currently translating Mahatma Gandhi's autobiography into Esperanto. As the General Secretary of the Indian Esperanto Federation, he is organizing the 5th Asian Esperanto Congress in India in February 2008.

Marek Kosciielecki

Cultivation of Foreign Language Education in the Japanese Cultural Context

There seems to be surprisingly little work in English dealing with the Japanese experience with foreign languages and the impact this has had on Japan's societal modernization. By studying foreign languages, the Japanese have been able to analyze and adapt developments from other countries and utilize this knowledge in their own scientific and technological innovations. This paper is an attempt to provide a holistic description of a socio-cultural and sociolinguistic situation relevant to foreign language education in the Japanese cultural context. It incorporates both diachronic and synchronic information available to this writer in order to evaluate foreign language education in Japan and the effects it has had on the process of societal modernization.

Marek KOSCIIELECKI Educated in Poland, New Zealand and Australia. In the early 1970s he studied English and German at the Victoria University of Wellington, NZ. In 1984, he obtained an M.A. degree in applied linguistics from the Department of Linguistics (then under the direction of Professor M. A. K. Halliday) at the University of Sydney and in 1996 a Ph.D. in applied linguistics from Edith Cowan University, Perth, Australia. He has worked both at secondary and tertiary levels. At present, he is an assistant professor at the Open University of Hong Kong.

Robert Phillipson

The New Linguistic Imperial Order: Lessons from Europe of Worldwide Relevance

The use of English is expanding worldwide. In continental Europe (in European Union institutions and in member states), this is a direct result of US corporate-driven globalisation and military activity, and increasing European integration. Even prestigious European languages (French, German, ...) risk being down-graded, their linguistic capital reduced through accumulation processes that dovetail with the workings of the global economy and finance, media, and higher education. Competence in English gives its users inequitable advantages over speakers of other languages. The study of linguistic neoimperialism, and alternatives to it, needs to be linked to the formulation of policies for multilingualism at the supranational, national and subnational levels.

Robert PHILLIPSON British. He studied at the Universities of Cambridge and Leeds, and has a doctorate from the University of Amsterdam. He taught English in North Africa and eastern Europe before emigrating to Denmark. He is a Professor at Copenhagen Business School. Among his books are: *Linguistic Imperialism*, Oxford University Press, 1992; *English-Only Europe?: Challenging Language Policy*, Routledge, 2003. His research interests include the role of English in globalisation, linguistic neoimperialism, language rights, sociolinguistics, and language pedagogy. For details of CV and publications, several of which can be downloaded, see <http://www.cbs.dk/staff/phillipson>.

Kawahara Toshiaki

English Education and Language Policy in Japan

Some commentators on educational problems claim that Japan is far behind other Asian countries in terms of English education, pointing out that Japan's English teaching methodology is old-fashioned and, therefore, should be revamped. They also refer to the fact that Japanese are among the lowest ranking in TOEFL scores compared to other nationalities. However, our teaching methodology should not be blamed, if we recognize other reasons for this. We should pay attention to the fact that for a long time the Japanese people have not needed English much and, consequently, have been indifferent to English, in comparison to other Asian countries. In Japan, the Japanese language plays an important role in every aspect of the lives of the populace. Japanese fully functions in several important fields such as science, technology, administration, lawmaking, judiciary, mass media, education, industry, etc. For example, in graduate schools, many theses and dissertations are written in Japanese. In the light of this fact, we should not lament our poor performance of English by comparing it with other Asian countries where their mother tongues cannot cover some range of important activities. It is rather misleading to focus too much on a poor English ability shown

by Japanese. The purpose and methodology of English education should be re-considered by taking account of these other factors. In Japan, a great number of foreign books have been translated for academic or entertainment purposes. Japan is located in Asia, and it interacts with other Asian countries where people visit each other's nations, and merchandise/materials are traded. These are important factors. We should take these conditions into consideration when thinking of the future of English education and its relationship to language policies.

KAWAHARA Toshiaki, Ph.D. Professor, Faculty of Literature, Kyoto Koka Women's University. Main areas of research: language policy, English education and Asian Englishes. Major publications in Japanese include: *Language Policies across the World* (editor); *Multilingual Societies Have Come* (coeditor); *Language Service to Foreign Residents* (coeditor); *Englishes in Asia and Oceania* (coeditor).

Feng Zhiwei

The Role of the English Language in China

In this paper, the zigzag process of acceptance of English in China is described, the development of English teaching (including English textbook composing, English level test, etc.) in China is introduced. Now English teaching becomes an industry in China. More and more Chinese people like to learn English. The multilingual service is important aspect of Olympic Beijing 2008. The author suggests reinforce the teaching and learning of Chinese language in the same time of teaching English. How to balance the English teaching and Chinese teaching in China? It is a topic of language status planning in China.

FENG Zhiwei Senior research fellow and professor of computational linguistics, Institute of Applied Linguistics, The Ministry of Education (PRC). Now he is Appointed Professor in many universities, including Peking University, Zhejiang University, Communication University of China, Heilongjiang University. He is also the academic consultant of National Key Laboratory of Pattern Recognition (NLPR, CAS), member of Standardization Committee of State Language Commission, assessment member of China National Science Foundation, assessment member of National Philosophy & Social Science Fund, consultant of Trans-European Language Resource Infrastructure (TELRI, EU), consultant of Hong Kong Terminology Association, member of Consultant Committee of International Language Resources and Evaluation Congress (LREC), editorial board member of *International Journal of Corpus Linguistics* (IJCL, Amsterdam), *International Journal of Chinese and Computing* (IJCC, Singapore), *Zhongguo Yuwen* [Chinese Language] (Beijing), *Zhongguo Keji Shuyi* [Chinese Science and Technology Terms Journal] (Beijing). He has published 22 monograph books and 200 scientific papers.

Joseph Errington

Colonialism, Nationalism, and the Spread of the Languages of Wider Communication

Standard Indonesian is an unusual national language because it is spoken as a second language by the majority of Indonesia's citizens. This paper outlines the unusual colonial history of this language in order to raise broader questions about the different ways languages can be "owned" by speakers. It also discusses the more recent development of the Indonesian language into a tool of resistance to the Indonesian state in East Timor. Both of these developments are presented so as to emphasize complex political and cultural dynamics which can differ greatly between situations of what might otherwise seem to be similar examples of language "spread."

Joseph ERRINGTON Professor of Anthropology, and of International and Area Studies, at Yale University, in New Haven Connecticut, USA. He is also Chair of the Council on Southeast Asian studies at the Macmillan Center. Most of his writing and research have been focussed on language and social change in Indonesia, particularly among bilingual speakers of Indonesian and Javanese language in south-central Java. His most recent book, to be published in August 2007 by Blackwell, is *Linguistics in a Colonial World: A Story of Language, Meaning and Power*.

E. Annamalai

English in the Linguistic Ecology of India

Defining linguistic ecology as the relationship between communities in the pursuit of their interests, which is constantly recalibrated by the play of languages, the role played by English in the linguistic ecology of India during the colonial, nation-centric and globalizing periods is the subject matter of this paper. English is the latest of the species that seeks a place and role in the ecology, which is contested or conceded to by other species. The competitive demand for resources by English and other languages of the land and a search for complementary access to resources is a challenge to be faced in India and many other countries. This paper will describe this challenge and the multiple responses to it in India. One question is if the boundary between economic landscape and cultural landscape is sustainable. The evolutionary development in the relationship between languages will be contrasted with planned multi-lingualism, where the planning may be explicitly executed by the state or implicitly promoted by the market. Their relative power in the context of globalized market will be discussed.

E. ANNAMALAI, Ph.D. Holds a doctorate in Linguistics from the University of Chicago and is former Director of the Central Institute of Indian Languages (CIIL), Mysore, India. He currently teaches at Yale University. His view on language policy and programs, which evolved over years of work of the above kind, integrates the role of the government, the community and the individual regarding language use and stability of multilingualism. This view is articulated in "Reflections on a Language Policy for Multilingualism", published in the journal *Language Policy* 2: 2 (2003). The range of his work is available in the book *Managing Multilingualism in India: Political and Linguistic Dimensions* (2001). His research and programmatic work for maintaining multilingualism in India naturally led to the study of the role and place of English in Indian multilingualism and he has published on the educational and political aspects of English and the linguistic aspects of its use in communication mixed with Tamil. He is also involved in the creation of databases and dictionaries of Indian languages, particularly Tamil.

Amri Wandel

English in Asian Science

In the 20th century the scientific and internet revolution has influenced every aspect of our life. Both revolutions were followed by an intensive expansion of the English language. English is the major language of scientific papers and conferences. This process has not skipped the East Asian science. Chinese and Japanese scientists, who are frequently in the world front, publish scientific papers mainly in English. Many scientific conferences take place in East Asia, all have English as the Main and mostly the only conference language. I will review these trends from my personal experience and compare them to the attitude of Esperantists towards the hegemony of English.

Amri WANDEL Professor of Astrophysics at the University of Jerusalem. Member of the Academy of Esperanto, board member of the Universal Esperanto Association for Scientific and professional matters. Has published over a hundred professional and popular papers in scientific journals. In Esperanto has written several books and over a hundred articles.

■ Comments: Yoshitake Masaki

YOSHITAKE Masaki Associate professor at the English Language Education Course, Fukuoka University of Education. Specialty: communication studies. Research interests: intercultural/international communication conducted in English, with relation to English language education. Publications in Japanese: *Multicultural Society and Intercultural Communication* (coauthor); *Contemporary Communication Studies* (coauthor); *English Language Education in the 21st Century* (coauthor).

V. Panel Session 3: Identity, linguistic rights and transnationalism in Asia

Chair: Humphrey Tonkin (University of Hartford)

Probal Dasgupta

Mother Tongue Vitality: Translation as Cultivation

In this paper it is argued that what language planners have called “cultivation”, which is supposed to play a major role in maintaining the vitality of a language in the domains it has not lost, needs to be put in touch with current ideas in translation studies. In particular, a strategy of building the mother tongue up as a canon-cherishing fortress is less likely to work wonders than a strategy of maximizing transparency of communication. This idea corresponds to a specific take in the field of translation studies, whose interface with language planning has long awaited serious cultivation.

Probal DASGUPTA Ph.D. 1980, NYU, generative syntax. Taught linguistics in New York, Melbourne, Kolkata, Pune, Hyderabad, and Esperanto in Barlaston (U.K.) and San Francisco. One of the editors of *Language Problems and Language Planning*. Major publications: *The Otherness of English* (1993), *After Etymology* (2000), translations of four novels into and one novel from Esperanto. Vice-Chairman of the Academy of Esperanto since 2001, Honorary Member of Linguistic Society of America since 2004. Has been working at the Linguistic Research Unit of the Indian Statistical Institute, Kolkata, since 2006.

Totok Suhardijanto

Indonesian among Other Local Languages of Indonesia: Revisiting the Status and Relationship between Indonesian and Other Languages in Indonesia

This paper will focus on the status of Indonesian among its people in the current days. It will not only discuss Indonesian in relation to other local languages of Indonesia, but also its relation to other Malay dialects which are used either in Indonesian regions or in other countries.

Totok Suhardijanto Visiting lecturer at Keio University SFC. After graduating from his university, he joined as faculty member at University of Indonesia. He has been teaching at Faculty of Humanities University of Indonesia since 1993. He teaches Indonesian syntax and morphology and neurolinguistics. However, currently, his researches are focused on critical discourse analysis and corpus linguistics. From 2002 to 2004, he was invited as visiting lecturer at Keio University SFC. In 2005, he was invited again as visiting lecturer by the same university for teaching Indonesian language and cultures.

Yang Zhiqiang

Linguistic Situation of Chinese National Minorities: The Example Case of Miao

This paper discusses the language policy of P. R. China in relation to its ethnic minorities and their current status. More specifically, it focuses on the Miao (Hmong) people in China as a typical case, introducing how they use languages and perform bilingual education under the reforms and open-door policies since 1980s and reviewing the Miao (Hmong) intellectuals' arguments on the unification of writing systems together with their background.

YANG Zhiqiang Foreign research fellow, Japan Society for the Promotion of Science; visiting fellow, University of Tokyo. Acquired a Ph.D. on regional culture studies, Post-graduate Comprehensive Culture Studies, University of Tokyo in 2005. Professor, Institute of Anthropology and director general, Institute of Japanese Studies, Guizhou University, Guizhou Province, China in 2006. Staying in Japan for 2006-2008 as foreign research fellow, Japan Society for the Promotion of Science, he conducts a study on "Patriotic education in China and the society of ethnic minorities" at the University of Tokyo. Major fields of study: cultural anthropology and history, especially the transformation of the contemporary societies of ethnic minorities in China and their identities.

Hirataka Fumiya

Challenges for Japan as a Multilingual Country: Beyond Assistance to Foreign Residents

This paper addresses the question of language policy in Japan from the point of view of the language rights of foreigners resident in Japan, noting that this concerns not only foreign residents but also the Japanese majority. Considering the language rights of foreigners from two aspects – learning Japanese and maintaining native languages – shows the importance of Japanese language teaching and native language teaching. In the teaching of Japanese to foreigners, knowledge of their native languages is indispensable. Furthermore, in today's increasingly multilingual and multicultural Japan, there are ever more opportunities to have contact with foreign languages and cultures. Taking advantage of these opportunities, there are increasingly visible efforts to change the consciousness of the host side Japanese and to reconsider foreign language teaching in this country. Referring to an example of experimental lessons in a public primary school, this paper shows that the progress of "internal internationalisation" due to the increasing numbers of foreign residents is also leading towards reforms in foreign language teaching in Japan.

HIRATAKA Fumiya, Ph.D. Professor, Faculty of Policy Management, Keio University at Shonan Fujisawa. Main areas of research: sociolinguistics, foreign language education and research (especially Japanese and German as a second language). Major publications include: *Der Erwerb der Temporalität im Japanischen als Zweitsprache*, München: iudicium, 2001; books in Japanese: *Multilingual Society and Study Support of Foreigners* (coeditor); *Redesign of Foreign Language Education* (coeditor).

Mark Fettes

Esperanto, an Asian Language?: Growth-Promoting and Growth-Limiting Factors in an Evolving Interlingual Ecosystem

Esperanto has a long history in Asia, a fact often neglected in discussions of its cultural and social significance. That history includes the dimensions of politics, identity, and education, which together situate the language with a complex network of interpersonal and interlingual relationships. If one wishes to forecast the future evolution of such a system, one needs to understand the structural factors that limit Esperanto's growth, along with the factors that propel its spread. Such an analysis sheds light not only on Esperanto's characteristics as a language, but also on the broader linguistic ecosystem within which it constitutes a minor but noteworthy index of systemic change.

Mark FETTES Professor of education at Simon Fraser University in Vancouver, Canada. His areas of research include education in indigenous communities, the role of imagination in learning and teaching, and ecological approaches to language policy and planning. He is a director of the US-based Esperantic Studies Foundation and author of several scholarly articles on social and political aspects of Esperanto.

■ Comments: Shoji Hiroshi

SHOJI Hiroshi Professor, Department of Social Research, National Museum of Ethnology. His areas of research are linguistics, multilingualism, and language policies. Recent main interest is in immigrant languages. Major publications in Japanese include: *Encyclopaedia of Multilingualism in Japan* (coeditor); *The First peoples in Present Day Europe* (coeditor); *The 20th Century: The Language Era*; in English: "Multilingualization: A Breakthrough into Japanese language consciousness?" in Joseph F. Kess et al. (eds.), *Changing Japanese Identities in Multicultural Canada*, University of Victoria, 2003.